
人間天使と性別人間

嵐金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間天使と性別人間

【Nコード】

N6191Z

【作者名】

嵐金

【あらすじ】

ごく普通の人間として、吸血鬼——グレイのパートナーを務めてきた佐川紅丞。だが、彼はある日、突然、人間を辞めてしまう……！？

今回は性別人間シリーズ4作目。前作「性別人間と魔界少年」から見た方が多分わかりやすいかと。

12／23 ご指摘により、作者名変更しました。ご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ありませんでした。

プロローグ

「俺、お前の事が好きだ。」

……あの告白から、3ヶ月半くらいたった頃。

告白された当の本人、安藤未来は、一向に返事を返してくれない。それどころか、暁文とグレイにベツタリなようだった。

フラれたか？と思ったが、未来に限って断りの返事を返してくれないのは、どうもおかしい。

あいつは、人一番正義感が強いんだ。…返事なら必ず返してくれるはずだ。

でも、それがない。

まさか……忘れた？

自然消滅って奴か？

そんな事……あるのか？

にわかには信じられない。でも、あり得ないとも言切れない。

現に未来は、学校で俺と会っても、部活の話とか、グレイの話とかしかせず、告白の件についてはノータッチなのだ。

未来は、俺が告白したことを……忘れてるのか？

そうだとしたら、もし、そうだとしたら……もう一度、告白するべきなのだろうか？

……無理だ。

あの、胸の奥で、心臓が張り裂けそうになる緊張感……もう今の俺には耐えられそうにない。

もう、諦めるしか無いのか……。

そんな風に、若干ネガティブになりかけていた俺、佐川紅丞^{こうすけ}。
そんな俺は、ある日突然、人間を辞める羽目になった――。

プロローグ（後書き）

今回はまさかの紅丞視点。友人に宣伝してただけに、勝手にプレッシャー感じています。

……と、ここでとりあえず、主人公の紅丞についてちよっくら説明を。

佐川紅丞

年齢…18歳、高校3年生（今作から）。11月30日生まれ。

身長…165センチ。

未来に告白した人物。見た目は学校で上位を争うイケメンだが、性格は打たれ弱く、涙脆く、女々しい。

こんなところですね。身長165センチって高いんだか低いんだか判らないっす。

事故

「んー……。」

朝。眩しい朝日が部屋に容赦なく入り込み、俺は目を覚ました。

「眩しっ……。」

そういえば、昨日、寝る前にカーテンを閉めるのを忘れていた。

「……寒い。」

寒さに負けて、毛布をかぶる。

もう4月だが、北の大地はまだ寒い。

——実は、1週間前から高3になったのだ。

てことは、未来は高2。

……あと1年で、未来と離れてしまう。

思えば、未来に恋をしたあたりから、進学活動とか、就活とかが全く眼中に無かった。未来のことで頭がいっぱいだった。

「はぁ……。」

また今日も学校に行かねばならない。正直言うと面倒だが、いかなかったら未来に怒られそうなので、早めに支度をする事にした。

部屋を出て、階段を降りてキッチンに行く。

「喉乾いた……。」

キッチンに行き、蛇口を捻る。

水が——出ない。

「あ……水道工事で水出ないのか……。」

家の近くで水道工事を行っているため、現在我が家は断水中。仕方ないので冷蔵庫に何かないか探すことに。

「えーと、飲み物飲み物……何も無えな……。」

近頃、買い物に行っていないせいで飲み物が何一つ無かった。

「どーすっかなあ……ん？」

ふと、冷蔵庫の隅に、銀色の瓶を見つけた。……大きさはだいたい、酒の一升瓶と同じくらい。

「なんだこれ……グレイのか？」

持ち上げてみると、物凄く重たい。多分、満杯状態なのだろう。

そういえば……以前、グレイが、俺の血をコツコツ貯めている……とか言ってたな。

「てことは、これ、俺の血か……。」

銀色の瓶をまじまじと見つめ、それを冷蔵庫から取り出す。

ふたを開け、そっと匂いを嗅いでみた。

……案の定、血の匂いがした。

「喉乾いてるし……別にいいか。」

まあ、俺の血なわけだし、飲んでしまっても、本体がここにいるわけだから、怒られはしないか……。

瓶の中の血をコップには移さず、俺はそのままラッパ飲みした。

「紅丞、おはよー。」

眠い目を擦りながら、グレイがキッチンに入ってきた。

キョロキョロとあたりを見渡し、俺の姿を見つけた。

「紅丞ー。何して………紅丞っ!？」

グレイは驚愕した。

そりゃあ、そうだろう。せっかくコツコツ貯めてきた血を目の前で飲まれて、驚愕しない方が変だ。

でも、 그레이が気付いたときにはすでに遅く、俺は瓶の中の血を一滴残らず飲み干してしまっていた。

「っ……ふうー……。」

味は、やっぱり血の味がした。……でも、何かが変だった。

何というか、酸っぱいような、甘いような……人間の血って、こんな味だったっけ？

疑問を感じつつ、 그레이の方を見た。

그레이の瞳は、真っ青になっていた。

「……紅丞、まさか、全部飲んじゃったの……？」

그레이がか細い声で質問してきた。

「そうだけど……何だよ？別に全部飲んでも良いじゃねえか。どうせ俺の血なんだろう？」

俺の言葉に、何故か 그레이は首をぶんぶんと左右に振った。

「……違う。それ、紅丞の血じゃない。」

「はぁ？……じゃあ誰のだよ？」

俺からの質問に、 그레이は俯きながら答えた。

「……の。」

その言葉は、小さすぎて俺には聞こえなかった。

「……聞こえねえよ。もっとハッキリ言ってくれ。」

「だから……僕の血なんだよ。それ……。」

……はぁ？

「 그레이、冗談はやめろ。」

「……本当だよ。」

「じゃあ、何で自分の血なんか貯めてるんだよ？」

「そのうち、何かに使えるかなと思って……。」

그레이の顔や瞳が、だんだん悲しみを帯びてきた。

そして、こんなことを言いだした。

「……紅丞、人間が二十歳^{ハタチ}になる前に吸血鬼の血を飲んでしまったら、人間じゃ無くなっちゃうかもしれないんだよ？」

今度は俺が驚愕した。

……え？それって、どういうことだ？確か俺、 그레이の血を飲んでしまったわけだよな？てことは……え？俺、人間じゃなくなっちゃうの？

「…… 그레이、ちょっと待ってくれ、それって、どういう……。」

衝撃の事実^{事実}に、おびえた反応を見せる俺を後目に、 그레이は淡々と話し出した。

「……そのまんまの意味だよ。人間が吸血鬼の血を飲んでしまえば、人間は、人間には無い力を手に入れる……つまり、人間じゃなくなっちゃう……ってことだよ。」

「そ、それじゃあ、俺……。」

「でも、紅丞の場合は違う。……紅丞は僕の――天使と吸血鬼の血を同時に、しかも大量に飲んじゃったから、もしかしたら、命に関わるような変化が出てしまうかもしれない……。」

「い、命……？」

「うん。…ハッキリ言う……。」

그레이は少し言いくさうな顔をした後、すぐに俺の目を見て、こう言った。

「もしかしたら、紅丞は……”天使”になっちゃうかもしれない。」

「……え……？」

俺が……”天使”？

事故（後書き）

こっちではグレイについて軽く説明を。

グレイ

年齢…21歳。10月27日生まれ。

身長145センチ。

紅丞のパートナー。吸血鬼であり天使。一人称は「僕」だが、一応女の子。性格は泣き虫で甘えん坊だが我慢しがちなところがある。

キャラの誕生日、設定しました。

説明

僕の血は、その全体の約7割が天使の血で出来ている。

その血を、紅丞は”大量”に飲んでしまった。

……確かに、成長過程の人間が吸血鬼の血を飲んでしまえば、人間では無くなってしまう。それは事実。

吸血鬼の血”だけ”を飲んだのなら、未来ちゃんのように、性別が増えたりするだけで済む。

でも、今回はケースが違った。

紅丞は、僕の血を、”大量”に飲んだ。

……大量という部分が重要になる。

これはあくまで推測だけど……7割天使、3割吸血鬼の血を飲んだ紅丞は、吸血鬼の血の作用で人間にはない力を得ることになる。

そして、その力とは、同時に摂取した天使の血に、吸血鬼の血が作用し、紅丞の中にある人間の血の部分、およそ7割を天使に変えてしまうというもの。

……簡単に言うと、僕の中の吸血鬼の血によって、紅丞の身体全体の血の割合が、7割天使、3割人間……になってしまう。ということ。

以上のことを、僕は紅丞に説明した。

「マジ……かよ……。」

紅丞はがっくりと肩を落とした。

「紅丞……多分、あと数分ほどで、身体に見える変化が現れると思う……それがどんな変化かは、さすがに僕にも解らないけど……。」
僕の言葉は耳に入っているのか……解らないけど、紅丞はがっくりと肩を落とし、うなだれたままだった。

「紅丞、今日は学校、休んだ方がいいよ。未来ちゃんには僕から言
つておくから……。」

「……わかった。」

紅丞は俯いたまま、自分の部屋に戻っていった。

説明（後書き）

ちよっくら矛盾が生じても、作者は気にしない人です。

絶望

「畜生っ……。」

俺は自分の部屋に戻り、ベッドに倒れ込んだ。

……たった1度の過ちで、自分の運命がこうも簡単に変わってしまったなんて……。受け入れることが出来ない。

しかも、あと数分ほどで、身体に見える変化が現れてしまう……。俺は、人間ではなくなってしまう。

そうになったら……。俺はどうすりゃいいんだ？

人間としての生活を……。送ることは出来ないのか？

「……。未来……」

ふと、そう呟いてみた。

助けに来てはくれない。来るわけないんだ。

今の俺は——絶望だ。何も残らない……。。

「……どうすりゃいいんだよ。」

仰向けになり、天井を見上げる。

いっそ、このまま二度寝して、起きたら全部夢でした……。ならいいのにな……。。

なんて思っていた、その時——

ドクンッ

心臓が大きく脈打った。

「え……?」

今、何が……と思っていると――

「うっ!？」

急に身体が熱くなった。

な、なんだ?これ…身体中の血が燃えるように熱い……全身から汗が吹き出てる……。

背中と目が痛い……苦しい…。

そして――

「……うあああああああ……!!」

俺は気を失った。

人間天使

「うっ……。」

なんだろう……。身体がだるい……。頭が痛い……。俺、今まで何してたんだ……。？

気がつくと、時計の針は3時を指していた。

「水……。」

断水していることも忘れ、俺は壁づたいに、洗面所に向かって歩いた。

洗面所にたどり着き、すぐるように蛇口をひねる。

案の定、水は出ない。

「え？……ああ、工事で断水してんのか……。」

そんなことを言いながら、顔を上げ、目の前に掛けてある鏡を見た。

「……え？」

そこに写る自分の姿に、驚愕した。

俺の身体は、肌がまるでグレイのような真っ白い色に染まっており、黒かった瞳の色は、絶望を示す青色に。黒かった髪は……。澄んだ空のような水色になっていた。

「な、なんだよ、これっ……。」

俺の心中を察するように、鏡の中の俺の瞳の色が更に青くなっている……。

全て、思い出した。

確か俺……グレイの血を、それもかなりの量を飲んじまったんだっけ……。

それで、これか……。

「っ……笑えねえよ…。」

俺はその場に崩れるように座り込んだ。すると――

「紅丞……。」

後ろから 그레이 の声がした。

「그레이…俺…。」

「……ちよっと、こっち来て。」

そう言うと、그레이は俺の部屋に行ってしまった。

俺も立ち上がり、後に続いた。

部屋に行くと、그레이が深刻な顔をして待っていた。

「……ベッドに座って。」

俺は言われるがまま、ベッドに腰を下ろす。

すると、그레이が俺に近付き、いきなり俺の腕を掴んだ。

「……なんだよ、いきなり。」

「すぐ終わるから、じっとしてて。」

그레이の目は、真剣そのものだった。……従うしかない、と思った。
그레이は俺の腕を見つめ、目を見つめ、髪を見た後、こう言いだした。

「…髪と肌と目が、完全に天使になってる。」

「えっ……？」

「口開けてみて。」

驚いてる俺に構うことなく、그레이は続けた。

……仕方なく、口を開けてみせる。

「……吸血鬼の要素は無いみたい…。もう閉じていいよ。」

「なあ……그레이、これ、何をしてるんだ？」

俺からの質問に、그레이は少し冷酷な感じで答えた。

「……さっき言ったでしょ？天使の血が7割で、人間の血が3割になるって。今、その3割の部分を採してるんだよ。……ちよっと、

立ってもらえる？」

俺は立ち上がった。

その瞬間、グレイは俺の身体にしがみつき、胸の辺りに耳をあてた。

「ちょっ……グレイ？ 一体何を――」

「紅丞、少し黙ってて。」

「……………」

数秒後、グレイは俺から離れた。

「心臓の音は人間の時と変わってない。……多分、残りの3割は、臓器のことかもしれない。」

「……でも、わかったところで何の意味があるんだよ？」

「いや、特に意味はないんだ。ただ、紅丞が少しでも元氣になれば、と思って……………」

「……気持ちは嬉しい。でも俺の知りたいことはそんなことじゃなくて……その……俺は、元の人間の身体に戻るのか？」

俺からの質問に、グレイは一呼吸おいて、こう切り出した。

「……僕は他にも、誤って天使になってしまった人間の話を聞いたことがあるけど、人間の身体に戻ったなんて話、聞いたこと無い……………」

え？

ちょっと待ってくれ…………え？

「じゃあ、俺、一生このままなのか…………？」

グレイは悲しそうな顔をして答えた。

「……多分、そうだと思う。」

「そんな……………」

嘘…………だろ？

一生、このまま…………？

こんな身体じゃ、外に出ることも出来ないって言うのに……？

「……………」

何も言葉が出ない。

放心状態…時間が止まってるみたいだ。

実際に止まってくれれば、嬉しいんだがな……。
すると――

ピンポーン

家のチャイムが鳴った――のと同時に

ガチャツと、家のドアが開いた。

……誰だ？こんな時に……。こんな姿じゃ、人に会えないって言うの
に……。

そして、信じられない声が聞こえた。

「紅丞せんぱーい。いますかー？……安藤ですー。」
声の主は、安藤未来だった。

発見

「み、未来ちゃん！？……なんで来ちゃったんだろう……？」

グレイは、未来の突然の訪問に焦りを隠せない。……もちろん俺も。

「なあ、さっき、学校休むときに、”未来には伝えておく”……みたいなこと言っただけだったか？あの後、未来になんて言ったんだよ？」

「……」紅丞は、夏風邪が酷いみたいだから休む”って……。」

「あのなあ……今何月だと思ってるんだよ……まだ4月だぞ。明らかに嘘だっから見抜かれるにきまってんだろ。」

「……ごめんなさい。」

謝ってももう遅い。未来は来てしまった。

「……それよりもさ、紅丞。どこかに隠れないと、未来ちゃんにその姿……見られちゃうよ。」

「ああ……わかってる。」

今ここでバレたら、冗談抜きでヤバイ。

早くどこかに――と、その時。

ガチャツ、とドアが開き、未来が部屋に入ってきた。そして――

「……先輩？」

未来は、俺の姿を見てしまった。

「……先輩、どうしたんですか？その姿……。」

「いや、これは、その……。」

戸惑う俺、するとグレイが……

「待って、紅丞。……未来ちゃん、僕が説明するから——」

そして、グレイは、起こったことを全て話した。

「せ、先輩が、人間じゃなくなる……って、そんな……嘘だよ、グレイ？」

「……本当だよ、未来ちゃん。」

「そんなっ……。」

未来は、先ほどの俺同様、呆然とその場に立ち尽くしていた。

「……未来ちゃん、ちょっと、2人だけで話がしたいんだけど、いかな？」

グレイがいきなりそんなことを言いだした。

その言葉に、今度は俺が食いついた。

「ちょっと待て、なんで俺抜きなんだ？」

「……紅丞は、聞かない方がいいから。」

そう言うのと、足早に未来を連れて出て行ってしまった。

「……なんだよ、俺に聞かれたくないことって……。」

そう言いながら、ふと、ベッドに横になろうと、振り返ったときに、ある異変に気づいた。

「あれ？……服が大きい……。」

さっきまでピッタリだった服のサイズが、何故か少し大きい。手が袖に入って完全に隠れてしまっている。

足の方も、ズボンの裾が床についてしまっている。

「おかしいな……服のサイズ間違えたか？」

異変はそれだけではなかった。

……ベッドが高い。

高校入学の時に、高さを合わせて購入したはずのベッドが、異様に高く見えた。

「……どうなってんだ？」

グレイなら何か知ってるかもしれない。

俺は部屋を出て、床についてしまっているズボンの裾をまくり、階段を降りた。

リビングでは、グレイと未来が何かを話していた。

……そういえば、俺に聞かれたくないことって、何だろう？
俺は、ドアの影から、2人の会話に耳を傾けることにした。

発見（後書き）

とりあえず登場したので未来の事について紹介を。

安藤未来

年齢…17歳（多分今作から）。12月7日生まれ
身長…159センチ。

暁文のパートナー。正義感が強く、物事をはっきり言わない人が大嫌い。先輩だろうが人外だろうが悪いことをした者には容赦なく説教する。

こんなところですかね。誕生月は時期と辻褄が合うように、誕生日は適当につけました。

盗み聞き

「……未来ちゃん、以前、僕が精神的ストレスが原因で、身体が縮んでしまったことがあるよね？」

「うん……あの時は、天使が縮むって知って、結構驚いたけど……。」

「それでね……どうして僕がストレスで縮んでしまったか、わかる？」

「それは……天使だからでしょ？天使は、精神的ストレスで身体が縮むって瀬夏から聞いたことがあるから。」

なるほど、だからグレイはあの時、ほんの少しだが、縮んでしまったわけか。

「……だから天使は必然的に、精神的ストレスに耐えられるような、気の強いタイプが多いんだ。……弱いと、すぐに縮んで”消滅”してしまうからね。」

「でも、それと紅丞先輩と、何の関係が……？」

「未来ちゃん、紅丞の性格がどういうものか、解るよね？」

「うん……確か、先輩の性格は……あつ。」

未来は何かに気付いたように声を上げた。

……俺の性格と、天使の血と、どう関係してるんだ？

「確か、紅丞先輩って……。」

「……本人はコンプレックスに感じてるみたいだから、言いたくなかったんだけど……紅丞って、結構”打たれ弱い”よね？」

「うん。……軽い一言でも、簡単に傷ついてしまう……確か、そう言う人だったはず。」

……。

確かに俺は昔っから打たれ弱いが、そこまで言う必要あるか？

「てことは、未来ちゃん、わかるよね？」

「……簡単にストレスが溜まりやすい体質……ってこと？」

「そう。……要するに、”身体が縮みやすい体質”って事なんだ。」

”身体が縮みやすい体質”。

その言葉を聞いた瞬間、全身の血の気が引いていくのを感じた。

……え？

じゃあ、さつきから、服のサイズとか、ベッドの高さとか……俺が縮んでしまったのが原因……ってこと……？

そして更に、こんなことが聞こえた。

「……しかも、紅丞の場合、人間の血が邪魔をして、一度縮んだら元の大きさに戻れない可能性がある。」

……え？

「グレイ、それ、どういう——」

そこから先は、聞くことが出来なかった。

俺は放心状態のまま、ゆっくりと部屋に戻っていった——。

盗み聞き（後書き）

” 的 ” つけてよかったのかなあ…と思う今日この頃。

恐怖

「……………」

俺は自分の部屋に戻り、倒れるようにベッドに入った。

身体が……縮む？しかも、元に戻らない？

なんだそれ……最高の嘘じゃないか。

……でも、事実なんだ。しかも、最低な事実。

俺はいつか、身体が縮みまくって、”消滅”しちまうんだ。

……怖くないわけ無い。むしろ泣きたい気分だ。

まだ……まだ、未来に告白の返事を聞かないまま、終わってしまうのだろうか？

……嫌だ。俺は未来が好きだ。返事を聞けないまま消えるなんて嫌だ……。

そう思っていた、その時――

「っ!?!」

身体中に電流が流れるような感覚がした。

そして、部屋全体が急に広くなり始めた。

……違う。部屋が広くなってるんじゃない、俺が縮んでるんだ。

……身体が、縮む!?!縮みまくったら……消滅!?!

嫌だ!嫌だ!!!怖い!!怖すぎる!!!誰かつ……誰か助け――

すると

ガチャッ

「先輩、お待たせしまし……先輩っ!?!」

未来が一人で部屋に入ってきた。

「せ、先輩っ!?!」

俺の姿を見て、未来はすぐに俺に走り寄り、俺の身体に触れた。すると、身体の収縮が止まった。

「先輩、何があったんですか!？」

「わかんねえ……。急に身体が縮みだして……。」

俺の身長はもう、未来の膝下ぐらいにまで縮んでいた。服もブカブカで、少し脱げかかっている。

「……なあ、未来。俺……元の大きさに戻れないのか?」

「え?……まさか、さっきの話、盗み聞きしてたんですか!？」
俺は小さく頷いた。

「なんてことを……。盗み聞きなんてしちゃダメじゃないですか!」
「……ごめん。……なあ、俺、このまま縮みまくって……消滅、しちまうのか?」

「そ、それは、その――」

「俺、消えちまうのか?死んじゃうのか?……どうなんだよっ、未来――」

その瞬間、未来は急に、小さくなった俺の身体をぎゅっ、と抱きしめた。

「っ……え?」

今、俺、抱きしめられてる?……未来に?

……心臓が俺の胸の奥で暴れてる。

未来……凄く暖かい……このまま眠ってしまいそうだ……。

すると、”トクッ、トクッ”という規則正しく動く、心地の良い音が耳に飛び込んできた。

これは、未来の心臓の音だ。しかも、かなり速い。

「……未来?」

「……私、もうこれ以上、先輩を縮ませたりしません。絶対に元に戻して見せます。」
断言された。でも――

「でも、もうこんなに縮んじまってんのに……どうするつもりだよ……?」

すると、未来は俺を離し、俺を見つめ始めた。

……至近距離で目があっている。心臓が更に鼓動を速める……。

「み、未来、何するつもりだよ……?」

俺の質問に答えることなく、未来は意を決したような表情をすると、俺に顔を近づけてきた。

俺は反射的に目を閉じる。

そして――

唇に、柔らかい何かが触れた。

そっと目を開けてみると、未来の顔がすぐ目の前にあった。その距離、0?。

突然のことに理解が追いつかない。

今、俺、未来と……”キス”してんのか?何で?

すると、その瞬間、またしても、身体に電流が流れるような感覚がし、俺の身体は、徐々に成長していった――。

希望？

身体が元の大きさに戻った。

でも、未来はまだ俺を離してくれない。

……そろそろ苦しくなってきた。

「んっ……。」

未来…離してくれ……。

口が動かない代わりに、心の奥でそう念じる。

すると、念が通じたのか、未来は俺をそっと離れた。

「っ……はあっ……。」

俺はベッドの上に倒れ込む。

心臓の鼓動が僅かに身体を揺らしている。

「先輩、元の大きさに戻ってるじゃないですか。」

未来は余裕な表情を浮かべている。

「はあっ……そうみたい…だな…。」

「…大丈夫ですか？」

「……んなわけあるか。…頭は混乱してるわ、全身から汗が吹き出るわ、心拍数は上がりまくってるわ……もうわけわかんねえよ…。」

今、何が起こったんだ？」

「えっと……先輩は、身体が縮んでも、元の大きさに戻らないわけじゃなくて……」キス”をすれば元の大きさに戻るみたいなんです。」

「

「き、キス！？」

「はい、……それも、相手は私じゃないとダメなようで……。」

未来は軽く目を伏せながら言った。

「ま、マジか？」

「……実際に戻ったんですから、疑いようが無いじゃないですか。」
「いや、そうだけど……え？何でキスなんだ？」

俺からの質問に、未来は少し真面目な顔をして答えた。

「……盗み聞きしてたのなら知ってると思っただけなんです、天使は、精神的ストレスが原因で、身体が縮んでしまうんです。……ここまではいいですね？」

「ああ。」

「で、それを戻す方法は……」恋”なんです。」

「恋？」

「はい。……正確には”恋に満足した状態”なのですが……わかります？」

「……ごめん、解らない。」

「じゃあ説明しますね。」

そう言っていると、未来はいきなり俺の手を掴んだ。

「……何赤くなってるんですか？」

未来が呆れながらそんなことを言う。

「し、仕方ないだろ……早く説明してくれ。」

俺は目をそらしながら答える。

「……今、こうやって私が先輩に触れてる間、先輩はずっとドキドキし続けるわけですよ。」

「まあ、そう……なるけど。」

確かに、こうやって未来に触れられていると、心拍数が更に上がっていくのが解る。

「……これが、”恋に満足した状態”です。」

「え？……ごめん、解らない……。」

「ほら、好きな人と一緒にいるだけでドキドキするとか、よくある話じゃないですか？」

「まあ、確かに……。」

「ああ言う感じが、世間一般に言う”恋”なのは解りますよね？」
「す、少しは……。」

「で、今こうやって、触れ合っている状態が”恋に満足した状態”
って事です。」

「……でも、さっき、未来が俺の身体に触れても、元には戻らなかったぞ?」

「それは、先輩の中にある、3割の人間の血が邪魔をしているのが原因です。あれくらいでは元の大きさには戻りません。」

「だから、キスなのか……。」

「はい。先輩はある意味、”縮みやすく、元の大きさに戻りづらい”。そう言う体質なんです。」

「……てことは、ちよつと待てよ?……キスでしか元に戻れないってことは……。」

「……しよっちゅうキスする羽目になりますね、私達。」

「ま、マジかよ……。」

そんなことになったら、命がいくつあっても足りねえよ……恥ずかしさと緊張で精神崩壊するかもしれねえよ。

「でも、いいじゃないですか。先輩って、私のこと好きなんですよね?」

……え?

「今、なんて?」

「え?…ですから、先輩って、私のこと好きなんですよね?……自分で告白したのに、忘れたんですか?」

「……覚えててくれたのか?」

「え?」

「告白したの、覚えててくれたのか?」

「…当たり前じゃないですか。」

「……そっか…。」

ふと、俺の目から、大粒の涙がこぼれた。

「せ、先輩……?」

「いやあ、俺てつきり、未来が、俺が告白したこと忘れてるんじゃないかなとか思ってた……。」

袖で涙を拭きつつ、そう言った。

「忘れるわけ、ないじゃないですか。」

「だよなっ……すっげえ嬉しい……。」

涙が止まらない。

「……泣かないでくださいよ。」

未来が心配そうに俺の顔を覗く。

そして、こう言いだした。

「……実は私、今日は先輩に伝えたいことがあって来たんです。」

「え？……そうなのか？」

風邪が嘘だって見抜いたから、てつきり怒りに来たのかと思ったんだけど……。

「はい。」

未来は、1度恥ずかしそうに顔を伏せ、再び俺の方を向き直り――

「私、紅丞先輩の事が大好きです。」

その顔は、はにかむような笑顔だった。

希望？（後書き）

未来の説明が前々作の瀬夏の説明と若干矛盾が生じるかと思いますが、軽く受け流してください or z

告白

紅丞先輩に告白した。

直後、先輩は思考が停止したのか、5秒くらい固まっていた。

……先輩、意外と単純なんだな…。

なんて思いながら、先輩の手を離すと、先輩はゆっくりと身体を起こし、俯いてしまった。そして…

「……うっ…。」

そのまま、また泣き出してしまった。

「せ、先輩、泣かないでくださいよ。」

「だ、だって……。」

……これで先ほどのような幼児体型ならまだ良いものの、今は高校生体型なのでかなり滑稽に見える。

「……未来。」

「何ですか？」

「俺も、未来のこと……大好きだっ……。」

ほとんど涙声だったが、言いたいことは伝わった。

「……ありがとうございます。」

私は、先ほどと同様に、先輩をぎゅっと抱きしめた。

「未来いつ……。」

先輩も、私を抱きしめてくれた。

貫い泣き——とまではいかないが、先輩のすすり泣く声に、少し目が潤んでしまった。

決意

「先輩、私と同棲しましょう。」

泣きやんだ直後、未来からそんなことを言われた。

「え？……何で？」

「何でって……私の家から先輩の家まで最低でも1時間はかかるわけですから……その間に先輩が縮んだら大変でしょう？」

「ああ、なるほど……。」

「じゃあ、私、今から帰って荷物まとめてきますね。」

「え？俺の家で同棲するの？」

「はい。」

「マジか……。」

「……だらしない生活してたら……わかってますね？」

目が怖い目が怖い。

「は、はい……。」

「では、行ってきます。」

そう言っていると、未来は足早に立ち去ろうとし、ドアノブに手をかけた辺りで止まり、こちらを振り返った。

「あの、先輩。」

「ん？」

「……私がいらないからって、縮んだりしませんよね？」

「……どうだかな。」

少し不安を煽るようなことを言ってみた。

すると、未来の表情が急に真剣になり、早歩きで俺の元に歩いてきた。

そして、素早く顎を持ち上げ、キスをした。

「んっ……！？」

あまりの速さに怯んでしまった。

10秒後。ようやく未来は俺を離してくれた。

「はぁっ……。」

息が上がっている。

「それじゃ、先輩。行ってきます。」

疲れ果てた俺を後目に、未来はそう言うのと、早歩きで部屋を出て行ってしまった。

……怒らせちゃったかな…。

決意（後書き）

思い切ったことするキャラは嫌いじゃないです。

習得

未来が去った後、俺はすぐにグレイのところに行った。

「紅丞、どうしたの？そんな真剣な顔して……未来ちゃんと何かあった？」

グレイが心配そうな顔で聞いてきた。

「いや、確かに色々あったけど……聞かない方が良いと思う。」
教育に悪い。

「……わかった。」

「で、頼みがあるんだけど。」

「何？」

「俺に、憑依の方法を教えてくださいませんか？」

そういった途端、グレイの瞳が青く染まった。

「……え？」

「俺は、ずっと未来と一緒にいないといけない。……だから頼む、教えてくれ、何でもするから。」

「……わかったよ。」

グレイの表情は、不安一色だ。

「……グレイ、憑依って、そんなに難しいのか？」

「いや、簡単だよ。でも、紅丞がアレに耐えられるかどうか……。」

「な、なんだよ、アレって。」

「アレって言うのは……さすがに僕の口からは言えない。自分で確認してほしい。」

「わかった。じゃあ、憑依の方法、教えてくれるんだな？」

「うん。」

俺は、グレイから憑依の方法を教わった。

それは物凄く簡単だったが、グレイの説明がややこしくて、覚えるのにかなり時間がかかってしまった。

至福の時

未来が俺の家を出てから、約2時間半が経った。

そろそろ帰って来てもいいのになー。なんて思っていると――ガチャリ、と家のドアが開いた。

「紅丞せんぱーい。ただいま戻りましたー。」

「未来ちゃん、早かったねー。」

俺よりも先に、 그레이が玄関に向かう。

「……未来ちゃん、凄い量の荷物だね……。」

그레이はかなり啞然とした様子だった。

俺も玄関に向かい、荷物の量を確認した。

「……凄いな。」

大きめのキャリーバックが2つ。しかも両方ともパンパンになっている。

「未来、これ、何入ってんだ？」

「何って……女の子にそれ聞きます？」

未来と 그레이から同時に非難の視線が来た。

……別にそういうつもりじゃないんだけどな……おかしいな……あはは……。

「っ……やめろやめろ、2人して睨むんじゃねえよ……誤解だって。そんなに睨むと身体縮んじまうって。」

「まあ、そうだけど……ねえ？」

未来と 그레이が顔を見合わせる。

……ああー、辛い。

「……とにかく、その荷物、部屋に運ぶから、どっちか貸せ。」

「あ、良いです。一人で運ぶんで。」

……そんなに俺のこと信用できない？

「……ちなみにそれ、重量はどんくらいなんだ？」

「確か、両方とも15キロだったと思います。」

総重量30キロ……力持ちすぎんだろ、未来。

未来は、5分くらい時間をかけて、俺の部屋に荷物を運んだ。
そして、一息つくようにベッドに座ると、俺の方を見て、こう言い
だした。

「先輩……また縮んだんですか？」

「ああ、実はな……。」

先ほどから気づいてはいたのだが、身長が未来の胸の辺りまで縮ん
でいた。

「…先輩、何でそう簡単に縮んじゃうんですか。打たれ弱すぎでし
よ。」

「打たれ弱い俺をいじめるお前らもどうかと思うがな。」

「え？ 私たちがいつ先輩をいじめました？」

「…………。」

さっきの玄関での光景を今ここで再現してやりてえよ。

「……そう言えば、未来。」

「何ですか？」

「暁文はどうするんだ？」

「暁文は……」お腹が空いたら紅丞先輩の家に来るように”と言っ
ておいてあります。」

なるほど、それならいいか……。

「……先輩、ちよつとこっちに來てください。」

未来がそう言いながら手招きしてる。

「なんだよ、いきなり……。」

俺は言われるがまま、未来の元へ歩いていった。
すると、未来はいきなり立ち上がり、俺を抱きしめた。

「えっ……！？ ちよっ……いきなりなんだよ！？」

焦る俺。でも未来は…

「はぁー……先輩、暖かいですねー……。」

なんて言いながら俺を更に強く抱きしめた。

胸のあたりに俺の顔が来てるから、かなり気持ちのいい感触が――
って、そうじゃなくて。

「未来っ……苦しい…。」

「先輩、知ってます？天使って、寒さを感じないんですよ。」

「そ、そうなのか？」

「はい。…身体が常に暖かいんです。だからこういう風にぎゅーってすると、とても気持ちいいんですよ。……外から帰ってきたばかりで、寒かったんですねー……。」

「そうか……なあ、そろそろ離してくれても――」

俺が身を振ると、それを抑えようと、未来が更に腕に力を込める。

「もう少し、このままで…。」

っあー……苦しい…心拍数が上がってる……身体が熱い……。

「…わかった。わかったから、もう少し力を緩めてくれないか……？」

「嫌です。……どうせ逃げるでしょう？」

何故解った!？

「未来、お前、俺を暖房器具か何かだと思ってねえか……!？」

「少なくとも今はそうですね……。」

「……ふざけんな、早く離せっ!!」

「あっ、暴れないでくださいよ!!」

バタバタと暴れる俺を抑えようと、未来は俺を持ち上げ、ベッドに座った。

「……危ないですから、じっとしててください…。」

抵抗自体、無駄だと思った。

俺は仕方なく、未来に身体を預けることにした。

胸のあたりに耳を置き、そっと目を閉じる。

すると、さっきよりも速くて力強い、未来の心臓の音が聞こえた。

確か、吸血鬼と天使って、人間の心臓の音が好き……なんだっけ？

どうやら、それは今の俺も同じなようだった。

「……未来。」

「なんですか？」

「……未来の心臓の音が聞こえる。」

「………そうですか。」

「なんか、速くて、力強くて、気持ちいい…。グレイや、暁文の気持ちがあった気がする。」

「……ありがとうございます。」

未来は少し反応に困っているようだった。

「……俺、未来の事が好きだ……。」

ふと、そう言ってみた。

「……ありがとうございます。」

未来は更に腕に力を込める。

……心地良い、未来の心臓の音を聞きながら、いつの間にか俺は眠っていた。

至福の時（後書き）

現実世界の作者は明日から冬休みです。

確認と推測

「先輩……紅丞先輩、起きてくださいよ。」

ダメだ、何回揺すっても起きない。完全に熟睡してる……。

抱きしめた後、気が済んだので、離れたら、まさか眠ってしまってるとは……予想外だった。

先輩はまだ、私よりも少し小さい……小学生の体型のままである。

……やっぱり、寝たままキスして、元に戻すべきだろうか？ いや、さすがに怒られるか？……でも、全然起きないし…。

いいや、やってみよう。

私は意を決し、睡眠中の先輩にキスをした。

すると――

見る見るうちに身体が成長しているのが解った。

身体が元の大きさに戻り、さすがに起きるかな？

「んっ……未来？」

先輩が目を覚まし、ゆっくりと身を起こした。

「寝ちまった……。」

目を擦っている。

「……あれ？なんで元の大きさに戻ってんだ？」

「あ、私が戻しておきました。……起きないんで。」

「え、あ、わかった……ありがとう。」

先輩が顔を伏せる。……なんか、可愛いな！

「あの……先輩。」

「何だ？」

「これからのことなんですけど……どうします？学校とかありますし。」

「……………」

先輩は、深刻な顔をして黙ってしまった。そして――

「……未来。」

「なんでしょう?」

「俺……学校辞める。」

「えっ……!?!」

「だって、この姿じゃあ学校なんてとても無理だ……。今日だって休んじまったし。」

「ま、まだ人間に戻れないって決まったわけじゃ——」

「俺は、もう人間には戻れないんだよ!!」

辺りが、一気に静かになった。

「……先輩……」

「 그레이が言っていた……今まで、天使になった人間の話は何人も聞いてきたけど、元に戻った奴の話は聞いたこと無いって……。」

……なんだそれ。

「それ、ただの前例ですよね?」

「……え?」

「それって、 그레이が”聞いた話”ですよね?…… 그레이が”実際に見た”わけじゃないですよね?」

「それは、そうかもしれないけど——」

「しかも、その話、先輩の事を予言してるわけじゃないですよね?」

「……そうだけど、それがどうしたんだよ?」

私は両手で先輩の両肩を掴み、しっかりと目を見て、断言した。

「 그레이の話は、ただの前例に過ぎません。人間に戻るか、戻れないか、それを決めるのは紅丞先輩自身です。だから、学校辞める

なんて言わないでください。」

私がそういった瞬間、先輩の瞳が桜のようなピンク色に染まっていた。――水色の髪に、ピンクの瞳……凄く綺麗だ。

「ありがとうございます……未来……」

「いえ……私も、変なこと言って、すみませんでした。」

私は先輩の肩から、そっと手を離そうとした――その時、先輩がいきなり私の右手を掴み、引き寄せ、抱きしめてきた。

「え？あの……先輩？」

先輩の身体は、心なしか、震えてるように思えた。

「俺さ、未来が、俺のこと好きだって言ってくれて、本当に嬉しかった……。でも、そこまで心配してくれてるなんて思って無くて……。」

耳元から聞こえた先輩の声は、やっぱり涙声になっていた。

私は、先輩を宥めるように、軽く背中をさすった。

「……当たり前じゃないですか。私は、紅丞先輩を愛してるんですから。」

そう言うと、先輩は更に強く私を抱きしめた。

……先輩の暖かさが全身に伝わってくる。

「先輩、やっぱり暖かいですね……」

「……そうか？……あまりわからないけど……」

「自分からは解らないのかもしれないかもしれませんね。」

「……なあ、未来。」

「なんですか？」

「未来はさっき、”元に戻るか戻らないかを決めるのは俺自身”……って言ったよな。」

「はい。」

「それって、要するに、俺自身で元に戻る方法を探せ、って意味か？」

「いや、そういう意味ではないです。……ただ単に先輩を勇気付け

たかつただけなんで、気にしないでください。でも……。」

「でも？」

「…元に戻る方法、心当たりがあります。」

「本当か!？」

先輩が更に腕に力を込める。

「せ、先輩…苦しっ……。」

気管が、圧迫されてる……。

天使になった先輩の身体は、腕力や握力が人間の時の約3倍になっている、とグレイから聞いた。ので、かなり苦しい。

「え?……あつ、ごめん……。」

先輩は慌てて私を離れた。

「げほっ……だ、大丈夫です。」

「……それにしても、30キロのキャリーバッグを持てるほどの力持ちなのに、人の力には弱いんだな。」

「……………」

いつかこの人にはちゃんと力の事を伝えたいとな……。

「それで、その方法なんですけど……先輩、カラスって解ります?」

「カラスって……鳥の?」

「いいえ、あの、悪魔の方なんですけど…解ります?」

「ああ…確か、グレイの羽に寄生してるって聞いたことあるな…俺はまだ会ったことはないけど。」

「実は、カラスって、悪魔の王らしいんですよ。」

「悪魔の、王!？」

「俗に言う、魔王。ですね。」

「そうなのか…。」

「はい。…それで、もしかすると、カラスなら先輩を人間に戻してくれるかもしれませんよ。」

「…どういう意味だよ?」

「カラスは魔王です。その力は、通常の悪魔よりも多いんです。私も、何度か助けてもらったことがありますから、もしかすれば……。」

「なるほどな……。でも、カラスでも無理だったら、どうすればいいんだよ？」

「…そこは考えてませんでした。でも、カラスを信じましょう、今はそれしかありませんよ。」

「そうか……。だけどな、未来。1つだけ、問題がある。」

「なんですか？問題って……。」

「俺はまだ、カラスに会ったことがない。」

「それが、どうかしたんですか？」

「だって、俺はグレイと、かれこれもう半年は一緒にいる。…なのに、カラスは一向に俺に姿を見せない、未来の目の前には現れたのに……。これって変じゃないか？」

「先輩の事を避けてる……ってことですか？」

「俺はそう考えてるんだが、どうだろう？」

「どうだろうって……カラスに聞いてみなきゃ、わからないじゃないですか。」

「いや、だから……な？」

「……私に聞け、と？」

「頼む。」

先輩の表情はかなり真剣だ。

「……わかりました。出来れば、聞いてきます。」

「ありがとう。」

先輩は少し嬉しそうな顔をした。

最低www

窓の外は、そろそろ日が沈みかけていた。

「もうこんな時間……そろそろ、暁文が来る頃だと思います。あいつ、今日は昼飯も食べてないんですよ……。」

「てことは、俺もそろそろグレイに……あ、でも、身体の7割は天使の血だから、無理なわけか……てことは……。」

俺は、期待の眼差しで未来を見る。

「……解ってますよ。グレイの分まで　私　が　血をあげればいいんですよ?」

「……今、さりげなく、”私”の部分強調された気がする。」

「……なんか、ごめんな。」

「いいですよ、仕方ないですから。じゃあ、暁文が来る前に、夕食済ませたいんで、台所借りていいですか?」

「別にいいけど……冷蔵庫の中はほとんど空^{カラ}だし、家の近くの水道工事で断水中だから、水は出ないぞ?」

「……そんな状態でどうやって生活してたんですか。」

未来が軽く俺を睨む。

「いや、普通に、コンビニ弁当とか、ジャンクフードとかで……。」

「……不健康すぎますって!ちゃんと自炊してくださいよ!それでも高校生ですか!?……そんな不健康な生活送ってるから、グレイの成長が遅くなるんですよ!?グレイは先輩の血を頼りに生きてるんですから、もう少しちゃんとしてくださいよ!!!!」

「……怒られたー(´・ω・、)」

「……ごめん。」

「はあ……でも、水が出ないんじゃないですか……ちょっと近くのスーパー行ってなんか買ってきてみましょうか。」

「……もしかして、俺の分も作ってくれんの?」

「当たり前です。先輩がそんな不健康な生活送ってるなんて知りま

せんでした。…これからは私が毎日3食作りますんで。」

え？てことは…俺、毎日、未来の手料理が喰えるってこと？

実は、以前も喰ったことあるけど、あれは正直言うと、そこら辺の飯屋よりも美味しいと思う。どこにも手を抜いてない、絶品だ。

「……それは、嬉しいな。」

素直に感想を述べた。

「だからって、ダラダラしてばかりいたら承知しませんからね。少しは料理の1つや2つ、覚えてもらいますから。」

「え……マジで？」

「あと、私が料理してる間、ほかの家事もやってもらいますから。……できますよね？」

「いや、掃除も洗濯もできない。」

「……今までどうやって生きて来たんですか？」

質問がだんだん乱雑になってるような……。

「いや、たまに後輩を家に招いて、家事をしてもらったりしてたんだよね……。」

「……最っ低……。」

ズキッ

”最低”……その言葉は、俺の心にクリティカルヒットした。

なんか、身体が徐々に縮んでいくような――

「あつ、ちよつと、それくらいで縮まないでくださいよ!!」

咄嗟に未来は俺の肩を掴んだ。…身体の収縮が止まった。

「はぁ……。先輩、油断も隙もないですね……。」

「いや、最低は誰だって傷つくって……最低って……。」

「反芻しなくていいですから。……最低は言いました。ごめんなさい。」

未来は深く頭を下げた。

「…礼儀正しいのは相変わらずだな……これじゃあなんだか俺が未

来を苛めてるみたいだから、それじゃあ逆だから、頭上げてくれ。」
未来は頭を上げた。

「先輩、”逆だから”って……その言い方だと、私が先輩を苛めてるように聞こえますけど？」

「いや、だってそうだろ、最低って……。」

「……あれはただ、”私の紅丞先輩”が他の誰かに既に色々されてるって考えちゃって、それでつい……。」

ぐはっ……”私の紅丞先輩”、だによ……めちゃくちゃ嬉しいこと言ってくれるじゃねえか……。」

「未来っ、その言葉、すっげえ嬉しいよ、ありがとう。」

「なんか、やけに目が輝いてますけど、私何か変な事言いました？」
しかも気付いてねえの……可愛いなーこいつ……。」

「先輩、ずっとニヤニヤしてますけど、何かいいことでもあったんですか？」

「いや、気付いてないならいいよ、あはは……。」

「?……まあいいですけど……あ、そろそろ買い物行かなきゃ……。」
立ち上がろうとする未来の手をとっさに掴む。

「あっ、どうしたんですか？」

「どうしたですかじゃねえよ。身体縮んだんだから、戻してくれ。」

「……すみません、忘れてました。」

忘れんな。

そう思っていると、未来は俺の顎を持ち上げ、唇にキスをした。

身体に電流が流れる感覚がして、身体がどんどん成長していった。

しばらくして、未来は俺を離した。

「……なあ、未来。」

「なんですか？」

「身体が元の大きさに戻ってもまだキスし続けてるのは、何故だ？」

「何故って……完全に元に戻ったかなんて私からは分かりませんか……っい。」

「あ、そうなのか……。」

「はい。では、私、買い物行ってきますね。」

「あっ、未来。」

「どうしました？」

「できれば、連れて行ってほしいんだけど……。」

「…何ですか？」

「寂しいから。」

「……先輩、本当に高3ですか？」

「大人でも寂しがることはある。」

「我慢してください。それでは――」

「…放っておいたら、俺、縮んじまうかもしれないぞ？」

「自分の身体のハンデをそういう話術に組み込まないで下さいよ、仕方ないですねえ…でも、その姿じゃあ外を歩くことは…。」

「いや、大丈夫。実はさっき、グレイから憑依の方法を教えてもらったんだ。」

教えてもらっというて、披露しないのはおかしいからな…早めに実践に移りたいと思っていたところだ。

「まさか……私に憑依するつもりですか？」

「他に何があるんだよ？」

「まあ、そうですけど……大丈夫ですか？」

「まかせろ、バッチリだ。」

……多分。

「……なんか、不安ですね…でも、先輩を信じることにします。」

「ありがとな。」

俺は未来の肩に頭を乗せ、憑依の言葉を呟いた。

――これが、人生初の憑依だ。

言葉を呟いた途端に、俺の身体が半透明になり、未来の身体に吸い込まれていった。

未来の身体に入り込んだ瞬間に、俺は落下した。

最低WWW（後書き）

作者、一瞬調子乗りました。

憑依

——何が起きたのかよくわからなかった。

グレイからは、“憑依の方法と解除の方法”しか教えてもらってないので、“憑依した後、どうなるのか”までは教えてもらっていなかった。

……てっきり、身体に入り込めば、すぐに意識に到達すると思っていたのだが、それは単なる思い違いだった。

未来の身体に入り込み、そこで見たのは——闇。

単純に、周りが真っ暗な空間だった。

そして、そこには、足場が無かった。

……例えを使うなら、部屋があるだろう、と思い込んで扉を開けたら、真っ暗で床のない空間だった。と言ったところだろう。

そんな中を、俺は落下した。

「えっ!?!……うわあああああっ!!!!」

床も、何も見えない、全て真っ暗。

……どうなってんだ!?!……と思っていると——

バシャン!!

水のような——暗くてよくわからないが、液体のようなものに飛び込んだ。

多分、これが、グレイの言っていた“アレ”なのだろう。

……実は俺、思った以上にカナヅチなんだよね……何が思った以上なのか解らないけど。

水中で必死にもがいていると、あることに気がついた。

——苦しく、無い？

息が苦しくならない。試しに抵抗をやめ、沈みながら息を吸っても、肺にはちゃんと酸素が入った。……どういう事だろう？ そう思っている、今度は——

バシャン！！

水から抜けだし、俺はその場に叩きつけられた。
……水の底が無いって、どういう事だよ……。

「痛え……。」

俺は腰をさすりながら起きあがる。
すると——

（先輩？……大丈夫ですか？）

どこからともなく、未来の声が響いた。

「だ、大丈夫……多分、憑依成功だ……。」

てことは、今俺がいる、この真っ暗な空間……これが、未来の意識の中、ってことか……目の前には、未来の視界の光景が映し出されている。

（よかった……叫び声が身体の内側から響いてきたので、何かあったのかと……。）

「え？ あ、ごめん……。」

（大丈夫です。……それじゃあ、買い物行きますか。）

そう言うと、未来は立ち上がった。未来の視界が大きく揺れた。

（あ、そうだ、先輩。）

「何だ？」

(……買い物中に出てきたりしないでくださいよ?)

「……んなことしねえよ。」

(それなら良いですけど……。)

未来は一度脱いだコートを着直し、財布を持って家を出た。

(……寒いですねー。)

「もうすぐ暖かくなるさ。」

(先輩、帰ったらまた、先輩に抱きついてても良いですか?)

「え? あ、ああ。別に良いけど……。」

(ありがとうございます。)

未来は嬉しそうに笑った。

……なんだか、こっちにまで嬉しさが伝わってくる……。未来の感情が、俺の中に流れ込んでくる。

……ところで、

「なあ、未来。」

(何ですか?)

「これって……デートみたいだよな?」

それを聞いた瞬間、未来の足が止まった。

そして、周りから、”ドクンッ、ドクンッ”と、心臓の音が聞こえた。

——憑依している間は、意識の中から、その人の身体の音が聞こえることがある……ってグレイが言ってた。

「未来? ……どうした?」

走ってもないのに、未来の心拍数は上昇していた。

(……いえ、デートって聞いて、なんか恥ずかしくなって……そうかもしれないね。)

「なんだ……いきなり心拍数が上がり出すから、何かと思った。」

(え? ……私の心臓の音、聞こえるんですか?)

「うん……ハッキリと。」

(あ、そうなんですか……。)

「なんだよ、知らなかったのか?」

（いえ、知ってましたけど、聞こえるのは瀬夏と暁文とグレイだけかと思ってて……。）

「多分、憑依出来るものはみんな聞こえるんじゃないか？」

（そ、そうなんですか……。）

「なんだよ。恥ずかしいのか？」

（そりゃあ、それなりに……。）

「なんだ、結構可愛いな。」

（か、からかわないでください！行きますよ！！）

そう言うと、未来は足早に歩いていった。

「なんだよー。心拍数はさっきから上がりまくってんのに、素直じゃねえなー。……素直なのは心臓だけか……。」

（う、うるさいです！もう良いですから！！）

その後、俺たちは、未来と一緒に買い物を済ませた。

憑依（後書き）

ここら辺表現が……文才が来い!!
o r z

襲来（前書き）

サブタイはちょっと盛りすぎたかもしれません。

襲来

家に帰ると、玄関に見慣れた靴があるのが見えた。

……どうやら、暁文が来ているようだ。

速いなあ、もう来ちゃったのか……。

（暁文か？）

はい。……多分、会うとすぐに吸血されると思うので、もう身体から出てきてください。

（ああ、わかった。）

そう言うと、先輩は私の身体から抜け出した。

「……憑依って、するときは大変なのに、出るときは意外とアッサリしてるんですね……。」

「……みたいだな。」

「じゃあ、私、暁文に血をあげてきますんで、先に部屋に戻ってください。」

本当は夕飯の後にしたかったのだけど……仕方ない。

「わかった。」

先輩は足早に階段を昇っていった。

私は買い物袋の中身を冷蔵庫にしまうため、キッチンへ向かった。

紅丞先輩の家は、ある意味、大豪邸。

立派な門構えも、高そうな高級車が有るわけでもないが、家だけは普通の民家よりも少し広いのだ。

紅丞先輩の父親は、結構、名が知れた会社の設立者なので、どちらかというと金はあるらしい。

キッチンにある冷蔵庫に食材をしまい、リビングに行く。

……リビングでは、暁文とグレイがいた。

「未来、来るのが遅いぞ、腹減った。」

「いや、こんなに早く来るとは思ってた……。」

「未来ちゃん、紅丞が今、あんな状態だから、僕の分も血を分けてほしいんだけど……。」

「わかってるわかってる。」

「なんなんだこの2人……。」

「じゃあ、まずは暁文から。」

私がそう言うと、暁文は立ち上がり、私に近付き、素早く肩を掴んだ。

「そんな、抑えるようにしなくても、逃げないから。」

「いや、こうしないと歯が刺さらなくて……。」

そして、首筋に歯を刺した。

「いっ……。」

心なしか、いつもより深く刺されたような……気のせいだろうか？

——吸血鬼と言うのは、歯を刺したまま吸うのではなく、歯を刺し、血管に穴をあけ、歯を抜いてから吸い付く。……ので、刺すときと抜くとき、2回痛みが来る。

暁文は素早く歯を指し込み、素早く引き抜いた。

「暁文、もう少し丁寧にやってよ……焦るのは解るけど、ちょっと痛い……。」

実際は、ちょっとではなく、かなり痛い。

「んっ……ごめん。」

暁文は一言そう言うと、首筋に出来た穴に吸い付いた。

耳元からゴクゴクと血を飲み込む音が聞こえる。

物凄く美味しそうに飲んでくれるのは嬉しいんだけど、一口の血を吸う速度が速すぎて心臓が不整脈を引き起こしている。

「っ……暁文、もう少しゆっくり吸って……。」

聞こえてないのか、わざとなのか、暁文は更に吸う速度を速めた。すると——

髪が物凄い速さで短くなり、身体が男になった。

「あ、暁文、もう、良いだろ……?」

「……そうだな。」

暁文は俺を離し、ソファに座った。

「なあ、暁文……吸う速度、もう少し遅くしてもいいんじゃないか……?」

「昼飯抜きだったんだから、仕方ねえだろ。」

「まあそうだけど……じゃあ、次はグレイだな。」

それを聞き、グレイは俺に近付く。

「あれ?グレイ、吸血道具は?」

「必要ないよ。」

「でも、以前、血をあげた時は吸血道具必要じゃなかったっけ?」

「あれは権利剥奪の前だったからね。歯で吸血すると契約になっちゃうし、多重契約は死刑に相当するからできなかったんだ。」

でも、もう僕もアカツキも、もう吸血鬼界の住人じゃないから、多重契約しようが関係なくなっちゃったんだよ。」

「へえ……そうだったのか。」

それを聞き、俺は、グレイが血を吸いやすいように、しゃがんでグレイに視線をあわせる。

「未来ちゃん、僕も、もしかしたらアカツキと同じくらい喰い付くかもしれないけど、いいかな?」

「え?……まあ、好きなようにしていいよ。」

暁文が”自分の時とは対応が違うぞ”とでも言いたそうに、俺を睨んでいる。……俺は、”お前の場合は加減してくれねえだろ”と思いつつ、俺を睨み返した。

グレイはその事に一切気付かずに、まだ穴が開いている俺の首筋に吸い付いた。

やっぱり、暁文とは違う。そこまで一気に吸わないし、飲み方も悪くない。……全部、グレイの身体が小さいのが理由なわけだが。

ただ、強いて問題をあげるなら……。

「んっ……。」

……なんで血を飲み込むときにいちいち声を出すのか、という事だ。
「グレイ、何も、声出して飲まなくても良いんじゃないのか？」

グレイの頭を軽く撫でながら話しかける。

「声出さないと上手く飲み込めないんだよ。……喉が細いから。」

「ああ……そう言うことか。」

グレイは、本来なら21歳の身体なのだが、小さい頃に受けた迫害のせいで、10歳児程度の身体のまま、成長が止まってしまったのだ。

だから、身体そのものは小さいのだが、臓器の大きさがバラバラで、”胃は大きいのに食道が細い”というアンバランスな状態のため、声を出して飲む方がやりやすいのだそう。

「僕だって、恥ずかしいと思ってるんだからね？あまり掘り下げられると困るよ。」

「それは……ごめんなさい。」

俺の謝罪の言葉を聞き、グレイはまた血を吸い始めた。
すると――

髪が急速に長くなり、性別が切り替わった。

グレイはそれを確認し、私を離れた。

私はフラフラしながらもなんとか立ち上が――れなかった。

私はその場に倒れてしまった。

「未来ちゃん！大丈夫！？未来ちゃん！！」

グレイが私に駆け寄る。

「……眠い……」

私はそう呟いた。

「え……？」

「性別変わると眠くなるの……」

「え、そうだったの？」

「うん……」

ヤバイ、そろそろ^{まぶた}瞼が閉じかけてきた……。

すると、暁文が立ち上がり、私をお姫様抱っこした。

「あっ……暁文……」

「まったく……2人同時に血を与えるからそうなるんだろ？」

「一番吸ってたのはあんたでしょ……？」

「ん？……そうだったか？」

「確信犯か……」

「俺はちゃんと未来の性別が変わった直後に離しただろ、同じだ。」

そう言いながら、暁文は私を抱えたまま、グレイを置いて、リビン
グを出て、階段を昇り始めた。

「暁文、出来れば、今度からもう少し丁寧に吸って欲しい……よ……」

「
暁文に抱えられたまま、私は眠ってしまった。」

襲来（後書き）

暁文が登場したので、ちょっくら説明を。

朝比奈暁文

年齢…25歳。7月25日生まれ。

身長…175センチ。

未来のパートナーであり、吸血鬼。食にこだわりがあり、未来の血しか飲まない。他の吸血鬼からはアカツキと呼ばれている。

暁文の名前が2つある理由は今度書きます。

影？

夜。

今、俺の隣で未来が眠っている。

先ほど、暁文が「血を吸い終えたから。」と、眠った状態の未来を連れてきたのだ。

……なんか、”余ったから”って理由で残飯を与えられた犬のような気分だ…。

未来は、2度も血を吸われて、顔色は青白くなっている。
そっと髪をなでてみた。

「……ん…。」

未来は軽く寝返りを打ち、俺の方を向いた。

……寝顔が物凄く可愛い。独り占めしたい。

「……あれ？」

ふと、未来の髪に、黒い”影”のようなものが見えた。
触ろうとすると、消えてしまった。

「なんだ？今の…。」
すると――

「ん……あれ？…紅丞先輩…？」

未来が起きてしまった。

「未来、大丈夫か？」

「え？何か、あったんですか…？」

目をこすりながら未来が質問する。……めちゃくちゃ可愛い。

「いや、未来の髪に、黒い影のようなものが見えたからさ。」

「影…ですか？」

「ああ。」

「……わかりました。」

未来は、かなり深刻な表情をしていた。

「あ、そうだ、先輩。」

「何だ？」

「お腹、空きませんか？」

「……確かに。昼も食べてないし。」

「じゃあ私、すぐ作りますね。」

「もう動いて大丈夫なのか？」

「はい、なんとか。」

未来は颯爽と立ち上がり、部屋を出ていった。

俺は、部屋で一人、考え事をしていた。

——未来の髪に見えた黒い影……見覚えがある。

以前、似たような影が、グレイの羽にいるのを見たことがある。

グレイの羽……もしかして、あれが……カラス？

だとしたら、何故、未来の髪に？

考えていると――

「紅丞、ちょっといいかな？」

グレイが部屋に入ってきた。

「どうした？」

「実はさ、今、未来ちゃんがカラスの事について質問してきて……。」

「

「カラスの？何で？」

「…紅丞、未来ちゃんの髪に、黒い影のようなものが見えた、って

言ったよね？」

「ああ、確かに言っただけ……。」

「あれね……カラスなんだ、実は。」

グレイは比較的、真剣な顔でそう言った。

「…やっぱり、そうだったか。」

「知ってたの？」

「一度、グレイの羽にも似たような影を見つけたことがあるからな……多分そうじゃないかと思って。」

「そうなんだ……でも、なんでカラスは、未来ちゃんに憑いてたんだろう?」

「そんなの、俺が知るわけないだろ……あ、そうだ、グレイ。」

「何?」

「カラスって……どうして俺の前に姿を現さないんだ?」

そう言った瞬間、グレイの顔が暗くなった。

「それね……実はさっき、未来ちゃんがカラスにその事を聞いてたんだけど……どうやら、”紅丞に気付いてほしい事がある。” って言ってみたんで……。」

「俺に……気付いてほしい事?」

「うん。それに、”紅丞は何か大切なことを忘れている。” とも言ってた。」

「大切な事……解るわけないだろそんなの……ヒントが無すぎる。」

「だよな……僕もそのことは指摘したよ。でも、カラスは何も教えてくなくて……”紅丞なら思い出せる” って、それだけは言ってた。」

……どういうことだ? 俺なら思い出せる?……もしかして、カラスは以前、俺と会ったことがあるのか?

「どう? 何か思い出せそう?」

「……全然。それだけじゃ何も……ほかに何かヒントは?」

「もう無いよ。……カラスも意地悪だよな、素直に出てくればいいのに……。」

「だよな……ところで、カラスってどんな見た目してるんだ?」

「確か……僕と同じくらいの身長で、子供みtainな顔してるよ。」

「それはグレイも一緒だろ。他には?」

「確かに一緒だけだよ……えっと、他には……そういえば、悪魔って、実態が無いらしいよ。」

「実体が無いって……黒い影のままってことか? でも、確かに今、子

供みたいなって…。」

「そうじゃなくて…：なんていうのかな、その…悪魔って、どこで生まれるかわかる？」

「解らない。」

「…えっとね、悪魔って言うのは、人間の邪心…つまり、悪い心から生まれるんだ。それで、始めは、本当に”真っ黒な影”のような形なんだって。」

で、人間界で、自分の姿の元ネタを探し出して、それを元に姿を作ってから、魔界に行くんだって。…：カラスから聞いたから、本当かどうかわからないけどね。」

「てことは、グレイの言う、”カラスの子供のような見た目”は、人間界で子供の姿を元に作った…：ってことになるのか？」

「うん。…多分だけだね。」

「…：でも、どうして俺にそのことを話すんだ？」

「いや、それがね…：紅丞って、小さい頃、どんな子供だった？」

「え？…普通の子供だったと思うよ。よく遊んで、家の近くの公園とかに良く通い詰めてたし…：でも、それがどうしたんだよ？」

「いや…：なんでもない。」

グレイは目をそらした。

「どうしたんだよ？ 気になるじゃないか。」

「な、なんでもない…：じゃあ、僕、ちょっと未来ちゃんのところに行ってくるね…。」

グレイはそう言うと、逃げるように部屋を出て行った。

何なんだ？ 一体…。

影？（後書き）

何故未来の髪に影が…？その理由はそのうち明らかになります。多分。

内緒

「グレイ、お前、ヒント与えすぎ。」

リビングに着いた瞬間に、僕の羽に憑依してるカラスに怒られた。

「だって……ねえ、カラス、何で紅丞の前に現れないの？」

「お前は知らなくていい。」

カラスは羽から抜けだし、そっぽを向いてしまった。

「カラス……僕のこと嫌いになった？」

「……バーカ、んなわけあるか。ただ、アレだけは紅丞自身に思い出して欲しいだけだ。」

「…確認するけどさ、紅丞は小さい頃、カラスに会ったことがあって、紅丞がそれを思い出すまで、カラスは紅丞の前には現れない……ってことでいいんだよね？」

「そうだ。……紅丞なら、思い出せるはずだ。」

「カラスも変なこだわりを持ってるんだね……素直に出て来ればいいのに。……カラスなら、紅丞を人間に戻すことも出来るんだよね？」

「ああ。俺とグレイなら、紅丞を人間に戻すことが可能だ。でもその前に、紅丞には、”俺と会った時のこと”を、思い出して欲しいと思っている。」

「……ねえ、カラス。どうしてそこまでこだわるの？思い出して欲しかったら自分から言えばいいじゃん、なんなら僕が言っても――」

「ダメだ。」

カラスが僕を睨む。……思わず身体が竦んでしまった。

「紅丞自身が思い出さなきゃダメなんだ。……もうこれ以上は詮索するな。」

カラスはリビングのソファに座った。

「……カラス。」

「何だよ。」

「僕、カラスが思った以上にいい子じゃないから、もしかしたら紅丞にカラスの事言っちゃうかも知れないけど、それでもいいの?」

「……言いたければ言え、俺は紅丞を人間には戻さないからな。」

「そんな……。」

僕個人の意見としては、一秒でも早く、紅丞を人間に戻して、普通の日常に返してあげたいところなのだが……カラスが賛成してくれない……どうして?

「……そういえば、未来はどこ行ったんだ?」

「え?……どこ行ったんだろ?……?」

「もしかしてあいつ、紅丞にこの事を伝えに行ったんじゃないかな?」

「まさか、そんなこと……あるかも。」

ヤバイ。紅丞に知られたら、紅丞を元に戻してもらえなくなる……。僕はとっさに走り出し、紅丞の部屋に行った。

「紅丞っ!!」

勢いよく扉を開ける。

「わっ!?!……グレイ、どうしたんだ?」

部屋には、紅丞しかいなかった。

「紅丞、未来ちゃん知らない?」

「え?……知らない、リビングにいるんじゃないのか?」

紅丞の言ってることは本当のようだった。

「それが……リビングに行ったら、いなくて……勝手に帰ったなんて考えられないし……。」

「キッチンにはいないのか?」

「え? 何でキッチン?」

「未来が、飯作ってくれてるから、キッチンにいて思うんだが……。」

紅丞の家は、リビングとキッチンが別々に配置してある。

……そういえばキッチンを見ていなかった。

「そっか……ありがとう、紅丞。」

僕は踵を返し、部屋を飛び出してキッチンへ向かった。

キッチンからは、何やら美味しそうな匂いが漂っていた。
扉を開けてみる。

「あっ、グレイ。」

未来ちゃんはキッチンで炒め物をしていた。

「未来ちゃん……探したよ。」

「私を？何で？」

「いや、なんでもない。…何作ってるの？」

「何だと思う？」

未来ちゃんは笑顔で僕に問いかけた。

僕は未来ちゃんの持つフライパンを覗きながら答えた。

「これ……野菜炒め？」

「そう。…紅丞先輩、アレルギーとか無いよね？」

「無い…けど……。」

「けど？」

「…いや、何でもない。」

「？…別にいいけど、もうすぐ食べるから、紅丞先輩呼んできて。」

「うん。」

僕はキッチンをでて紅丞の部屋に行った。

「紅丞ー、ご飯だってさ。」

「おう。内容は？」

「行ってみてのお楽しみだよ、…多分。」

「ふーん……わかった。」

紅丞は複雑な表情を浮かべながら1階に下りて行った。

内緒（後書き）

妙なこだわりを持っているのは作者もカラスも一緒です。

夕食

テーブルの上に並べられた料理を見た瞬間、俺のテンションは一気に下がった。

「野菜炒め…ですか。」

思わず敬語になってしまいう程に。

「そうですけど…：…どうかしたんですか？」

そう言えば、未来には話してなかったな…：…。

「未来ちゃん、あのね…：。」

グレイが未来に耳打ちする。

「…：…え？ そうなの？」

未来が驚いた表情を見せる。

「…でも、そんなの、別になんでもないじゃない。」

「いや、そうだけど、紅丞にとっては結構辛い事なんだよ。」

グレイが必死に説明している。

…：勘のいい人ならわかると思うけど、俺がこの世で1番苦手とするのが――野菜。

正確には野菜料理全般ダメである。…びっくりするほどの偏食なんだよね…俺。

「でも、もう作っちゃったし…：どうすればいいの？」

「残念だけど、紅丞には頑張って食べてもらうしかないよ。」

「そう…：…だよね。」

未来とグレイが同時に俺を見る。

「…：…頑張るよ。」

どんな拷問だ、これ…：…。

夕食（後書き）

私も野菜炒め駄目なんですよね…肉と一緒にならいいんですけどね。

羽

「疲れたー…。」

俺は自分の部屋に入り、ベッドに倒れこんだ。

「…先輩、食事で疲れるとか聞いたことないですから。」

「いや、本当に野菜だけは昔からダメなんだよ…。」

「……先輩、1つ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「先輩の両親は、先輩の野菜嫌いをどう思ってるんですか？」

「どう、って…父さんも母さんも、特に何も言ってなかったよ。

皿の隅に寄せて残したりしても、何にも言わなかった。放任主義…
って奴なのかな。」

「……そうですか。」

未来は複雑な表情を浮かべていた。

「でも、それがどうかしたのか？」

「いいえ、何でもありません。」

「ふーん…あ、そろそろ俺、風呂入らないと…。」

時間はもう8時を過ぎていた。

「風呂入るって言っても、断水してますし…どうするんですか？」

「家の近くの銭湯行く。」

「でも、その姿じゃ誰かに見つかったちゃうんじゃないんですか？」

「いや、あの場所、平日はほとんど人はいないんだよ。帽子でもかぶっていけば大丈夫。」

「わかりました。…その前に、先輩、1つ確認してもいいですか？」
「いいけど…。」

「じゃ、失礼します。」

そう言くと、未来はいきなり俺の服のボタンを外し始めた。

「え!?!…いきなりなんだよ!?!」

俺は反射的に未来の両手を掴んだ。

「痛っ……先輩、離してください……」

少し力を入れただけなのに、未来はかなり痛そうな表情をしていた。
「え？あ……ごめん。」

俺は手を離した。

「……先輩、言い忘れてたんですけど、先輩の身体は天使になったことによって、腕力とか握力とかが人間の時の約3倍になっているんで、ちょっと力を入れただけでも結構痛いんですよ……だから、できれば気を付けてください。」

「そ、そうなのか？それはごめん……でも、いきなりボタン外しだすから何かと思って……」

「それなんですけど、先輩、背中見せてもらえます？」

「別にいいけど……最初からそう言えよ……」

「言っても見せてくれないかと思って……すみません。」

俺は素直に服を脱ぎ、背中を見せた。

「……やっぱり、羽がありますね……」

「え、羽？」

「気付いてなかったんですか？」

俺は頑張って背中にも目を向けると……確かに、グレイと同じ、白い大きな羽がある。

「そうか……身体が天使だから、羽があるのか……そりゃそうだよな……」

「……気付いてなかったんですね……」

未来は呆れるように呟いた。

「だって、グレイはそんな事、一言も——」

「言われなくても解るでしょう？」

「いや、そうだけだな……でも、羽がどうかしたのか？」

「その事なんですけど……羽がある状態では、お風呂に入りにくいんじゃないかな、と思って……」

「そういえば、そうだな……でもまあ、グレイからアドバイスを貰えば何とかなるよ。」

「不安ですね…。」

「大丈夫だって。…未来は行かないのか？」

「私ですか？…じゃあ、一緒に行きましょうか？」

「てことは…2度目のデートか。」

未来が顔を赤くした。

「よ、余計な事言わなくていいですから！…準備してきますね。」
未来は部屋を出て行った。

悪戯

「あの…紅丞先輩。」

「何だ？」

「手、繋いでもいいですか？」

「え！？…いい、良いけど…。」

「じゃあ、失礼します。」

未来は少々恥ずかしがりながら俺の手を握った。

今、銭湯からの帰り道。俺は天使の身体だから寒さを感じないので、普段着のまま出てきた。

だが、未来はそうはいかないのでコートを着てはいるものの、手袋を忘れたらしく、上記の会話に繋がる。

「先輩、手、暖かいですね。」

そう言いながら、未来は更に身を寄せる。

俺はというと――

「そ、そうか？」

自分でも解るほどに顔を真っ赤にし、俯きながら歩いていた。……
声が震えている。

「先輩、前見ないと危ないですよ？」

未来が不思議な顔をしながら俺の顔を覗く。

「い、いや、解ってる……。」

顔なんて上げられるわけじゃないじゃん……こんなに近いのに…。

「もしかして……緊張してます？」

未来の問いかけに、俺は小さく頷いた。

「そーですかあ……。」

未来は怪しげに笑うと、急に手を離し、あろう事か俺の腕に抱きつくように腕を絡めた。

「っ!？」

言葉がでない。思わず立ち止まってしまった。

「先輩? どうしました?」

未来は何くわぬ顔で俺に問いかける。……確信犯か。

「い、いや、その……なんでもない……。」

……俺も、素直に”未来のせいだ”って言えば良いのにな……。

「それじゃ、行きましょうか。」

未来は無理矢理、俺を引っ張りながら歩き出した。

悪戯（後書き）

仲良いですねー。腹立つ。

見学

「ただいまー。」

家に帰ってきた。：結局未来は、家に入るまでずっと腕を絡めたままだった。

「あつ、暁文が来てますね……。」

未来が玄関の靴を確認しながらそう呟いた。
すると、リビングから暁文が現れた。

暁文は俺を見て少し驚いた顔をしたが、すぐに元に戻った。

「……紅丞さん、お邪魔しています。」

暁文は律儀に挨拶をした。……未来曰く、普段の暁文は、”自分勝手で何を考えているのか解らない”という話らしいが：果たして本当だろうか？

吸血が自分勝手って意味だろうか？

「じゃあ、紅丞先輩、私、暁文とグレイに血をあげてくるんで、部屋で待っててもらっても良いですか？」

「嫌だ。」

未来からの言葉に、俺は首を横に振った。

「え……何ですか？」

「何でって：いちゃ駄目か？」

「駄目じゃないですけど……。」

未来は気まずそうな顔をしている。

「俺は別に構いませんけど。……っていうか、未来、腹減った。」
暁文がそう言った。

「……………」

未来は複雑な表情で暁文に近付いた。

すると、暁文はいきなり未来を取り押さえるように抱きしめ、勢い

良く歯を刺した。

「うっ……。」

未来が苦痛の表情を浮かべる。

暁文はそのままがつつくように、吸血を開始した。――なるほど、確かに自分勝手かもしれないな…。

吸血を開始した直後、未来の身体に変化が現れた。髪が短くなり、体格が男らしくなった。

「暁文……離せっ…。」

暁文に指示を出す未来の声は、男の声になっていた。

「んっ……。」

暁文は未来を離れた。

「うっ……。」

未来は床に膝をついて座り込んでしまった。

「未来、大丈夫か？」

俺は素早く未来を抱きかかえる。

「あ……すみません、大丈夫です。」

未来は俺の肩を借りながら立ち上がった。

「暁文……ちょっと吸い過ぎなんじゃないのか？」

未来が暁文を睨む。

「いや、性別が変わってすぐ離れたから、普通だと思うが？」

暁文は首をかしげながら答えた。

「……もういいや。グレイは？」

「リビングにいる。」

「解った。」

未来は俺から手を離し、自分の足でリビングに行った。

「…紅丞さん、お見苦しいところを見せてすみませんでした。」

暁文が申し訳なさそうに頭を下げた。……一応、自覚はしてるみたいだ。

「別にいいけど…改善しようとは思わないのか？」

「いや、ああした方が飲みやすいんです。せめて未来がもう少し背が高ければ負担が少なくなると思うんですが…。」
そういう問題か？

俺が疑問に思っているところ――

「紅丞！、未来ちゃんが…。」
リビングからグレイが走って来た。

「どうした？」

「未来ちゃん、僕が吸血したら、また倒れちゃった…。」
「えっ!？」

驚く俺に対し、暁文は――

「ああ…さっきも倒れたんで、問題ないですよ。」
そう言いながらリビングに行った。俺も後に続く。

暁文はリビングに倒れている――既に性別が変わってる未来を抱き上げると、そのまま俺の部屋に向かっていった。

問題

さて、ここで問題だ。

普段自分の使っているベッドに、恋人が寝てて、今自分が就寝するためのベッドが無い場合。君ならどうする？

『（・∀・、）∩はい。一緒にベッドに入ります。』

黙れ作者。俺にそんな勇気あると思ってんのか。ていうか顔文字使うな。

……というわけで、今俺には寝床がない。

いや、あるんだけど、さっき暁文が未来を連れてきたときに、俺はつい”俺のベッドに寝かせといて”って言っちゃって……今、未来が占領してる。

「どおーすっかなあ……。」

未来はスヤスヤと寝息を立てており、全く起きる気配がない。

ぶっちゃけた話、俺のベッドはダブルベッド。…高校入学の時に、広いベッドに憧れて親に買ってもらったのである。

だから、俺が入れないわけではないのだが…流石に付き合い始めてまだ一日も経っていない状態で添い寝は無いだろうと本能的に判断した。

うーん……でも、正直な話、俺はこのベッドじゃないと寝られないのだ。…あれだ、枕変わると寝られない人みたいな…解る？

ベッドの横にしゃがみ、未来の顔を眺める。

……可愛い。めっちゃ可愛い。全然飽きない。眺めているだけで朝

が来そうだ。

すると――

「……あれ？」

未来が目を覚ました。

「あっ……紅丞先輩……」

目を擦りながら身を起こす。

「おう、起きたか。」

「はい……今何時ですか？」

未来からの質問に、俺はベッドの近くに置いてある目覚まし時計を指さした。

「……え、もう10時ですか!？」

実は未来が眠ってから、大体1時間ぐらい経っている。

「それは……すみませんでした。ベッドまで借りちゃって……」

未来はフラフラしながらベッドから降りた。

「それで、あの……先輩。私は今日どこで寝ればいいんでしょう？」

「そうだな……来客用の部屋があるから、そっちでもいいか？」

「はい、平気です。」

「よし、じゃあ案内するよ。」

俺は未来を連れて部屋を出た。

問題（後書き）

紅丞だって顔文字使ってるじゃんかよー……。。

2日目(土曜日)

「先輩、紅丞先輩っ、起きてください!!」

うーん……朝っぱらから騒がしい…。

薄らと目を開けてみると、未来が青ざめた表情でこっちを見ていた。

「……うおっ!？」

俺は慌てて飛び起きた。

え!?! 何で未来が俺の家に!?!

……あ、そうか、確か昨日、未来に告白されたんだっけ…忘れてた。大事な事なのに…。

それよりも——

「…あれ？」

身体が、縮んでいた。大体グレイと同じくらいの大きさに。…服がブカブカになっているのですねすぐ解る。

「え……何で？」

「先輩、それ、こっちのセリフです…。昨日、何があったんですか？」

未来は心配そうな表情でこちらを見ている。

「いや…昨日は普通に寝てたけど…どういうことだ？」

俺が疑問に思っていると、未来は指を顎にあててふむふむと考え出した。そして——

「…先輩、もしかすると先輩は元々、寝てる間でもストレスが溜まる体質なんじゃないんですか？」

「そう……なのか？」

「他に理由が思い浮かびませんよ…こんなに縮んじゃうなんて…。」

未来は俺を軽々と抱きかかえ、立ち上がった。

「本っ当に、目が離せませんね…。」

呆れたようにそう呟くと、俺に顔を近付け、キスをした。

「ん……。」

右手で身体を支え、左手で頭を固定している。……結構手馴れてるな、こいつ。

数秒後、身体の高さも元に戻り、すっかり目が覚めた。

「はあ……腹減った…。」

「じゃあ、朝ご飯にしましょうか。」

「えっと……ちなみに、内容は？」

「そうですね…先輩って、朝はご飯派ですか？パン派ですか？」

「野菜が出ないならどっちでも。」

「……私が作る朝食はどっちも野菜が入ってるんですけど。」

「ええー……？」

「嫌なら食べなくていいですよ？」

「…食べる。」

「じゃ、行きましょうか。」

未来は俺の手を掴むと、そのまま歩き出した。

2日目（土曜日）（後書き）

ほぼ1週間毎朝トーストにチョコ塗ったやつ食べてた小学校時代。

仕方ない嘘

「はい…はい。……そのことなのですが…」

朝7時。朝食を食べ終え、俺は今、家の電話から学校に電話をかけている。

昨日の無断欠席の事で、先生に理由を話していたのだ。

……とはいっても、”天使になりました。”なんて本当の事言えるわけない。ので――

「実は、昨日、いきなりインフルエンザにかかっちゃいまして…。」

時期は軽く過ぎているとはいえ、まだ寒い。ありえない話じゃない。それに、インフルエンザだと偽れば、強制的に1週間は休みを与えられる。…これはいい作戦だ。提案したのは未来だけだ。

「はい。気をつけます…それでは、失礼します。」

俺はゆっくりと電話を切った。

「…ふう。」

「先輩、終わりました？」

後ろから、未来が食器を洗いながら声をかけてきた。

「ああ、何とかバレずにすんだよ。」

「それはよかったです。…バレると大変ですもんね。」

未来ははにかみながら答えた。

俺が天使になって、早一日。水道工事が終わり、蛇口からは水がでるようになった。

これが後一日早ければ、俺が天使になることもなかったんだがな…。

「紅丞、未来ちゃん、おはよー。」

グレイが目を擦りながら眠たそうにリビングに入ってきた。

「おはよう。今日は早起きだな。いつもは8時くらいに起きるはずなのに。」

「うん……お腹すいちゃって……。」

グレイはゆっくりと未来に近付く。

「グレイ、ちゃんと吸血させてあげるけど、その前に顔洗ってきなさい。」

未来が素早く指示を出した。

「はい……。」

グレイは目を擦りながら、そのまま真っ直ぐ洗面所に行った。

「未来……ずいぶん手慣れてるんだな。」

「え？何がですか？」

「いや、確か、未来って小さい子供が苦手だったんじゃないかったか？瀬夏にあった時もそんな感じのこと言ってたし……。」

「ああー……もう慣れました。瀬夏のおかげで。」

そう言いながら、未来は食器を拭き、棚に戻した。

「未来ちゃん、顔洗ってきたよー。お腹すいちゃった。」

グレイが洗面所から早歩きで戻ってきた。

「解ってる解ってる。」

未来はグレイの前にしゃがむ。

グレイは元からある未来の首筋の噛み痕に、合わせるように歯を刺した。

「うっ……。」

未来の表情が苦痛で歪む。

が、すぐに元に戻った。

血を吸い始めた直後、未来の身体に変化が現れた。

髪が短くなり、顔つきが男らしくなっていく——やっぱり、何度見ても不思議だ。

数秒後、性別が男になり、グレイが未来から離れた。

「ごちそうさま、未来ちゃん。」

グレイの瞳は、血を吸って満足したからか、綺麗なピンク色だった。その時——

ピンポーン

家のチャイムが鳴った。

「あ、俺出ます。」

未来はそう言いながら玄関に行った。

手紙

「紅丞先輩、手紙来てますよ。」

未来が小さな封筒を持ってリビングに戻ってきた。
だが、何かが変だった。

「先輩、これ……差出人の名前書いてないですよ。」

封筒には、差出人の名前どころか、消印も切手も無かった。

「何か……怪しいな。」

とりあえず手紙を受け取る。

「配達員の人に訊いても、”わからない”って言われちゃいまして……どうしましょう？」

「そうだな……。」

悪戯かもしれないが、大事な内容の手紙かもしれないし……うーん……。

「紅丞、どうしたの？」

悩んでいると、 그레이が後ろから声をかけてきた。

「그레이、これ、どう思う？」

俺は 그레이の頭上で手紙をちらつかせる。

「うーん……消印も切手もないのは変だね……ちょっと貸してっ。」

그레이は軽くジャンプし、俺の手から手紙をひったくった。

「あっ、おい——」

그레이は手紙をまじまじと眺めると、いきなり封筒を開け始めた。

「「あっ！」」

驚く俺と未来を後目に、 그레이は封筒の中からあるものを取り出した

「それ……カードか？」

「みたいだね。」

二つ折りのカードのようなものが入っていた。

「えーと……あっ!!」

グレイがカードを広げた瞬間、歓声のような声を上げた。たちまち、グレイの瞳がピンクになる。そして――

「これ、姉ちゃんからだ!!」

突如、そう叫んだのだった。

疑問

「ちょっと待て 그레이、お前、姉がいるのか？」

未来からの質問に、그레이は少し驚いたように返した。

「あれ？言ってなかったっけ？」

「言ってねえよ、初耳だ。」

確かに、俺も初耳だ。그레이に姉がいたなんて…。

「姉ちゃんって言っても、腹違いの姉ちゃんなんだ。パパが同じっただけで。」

「…でも、なんで姉からの手紙だってわかったんだ？」

「字を見て解ったんだよ、ほら。」

그레이はカードを俺たちに見せた。

カードには、まるでゴシック体のような綺麗な字で、그레이の安否を気遣う文面が書かれていた。

そして、最後に一言——佐川家にお邪魔します。と書いてあった。てことは……

「もしかして、그레이の姉が俺の家に来るってことか？」

「そう言うことになるね。」

「でも、なんで急に？」

「解らない……姉ちゃん、結構気まぐれなんだよね…。」

「ふーん……。」

と、ここで1つ気になることが。

「……何時、来るんだ？」

手紙には家に行くただけ書いており、時間や日時なんかは一切記載されていなかった。

「それはわかんない。今かもしれないし、明日かもしれないし——」

その時。

ピンポーン

再び、チャイムが鳴った。

「まさか……な？」

俺はグレイに目配せする。

「まさか……ね？ちよつと待ってて。」

グレイと未来が玄関に向かう。俺も後に続く。

グレイが恐る恐る扉を開ける。そこにいたのは――

コートを着た、グレイによく似た顔立ちの、目が赤く肌が白い、ロ
ングヘアの背の高い若い女性だった。

疑問（後書き）

私も姉が欲しいです。兄しかいないから。

姉

「グレイーっ!! 久しぶりー!!!」

女はグレイを見るなり、いきなり抱きしめた。

「むぎゅうっ!?!」

あまりの出来事に、グレイは変な声を出しながら怯んでしまった。

「わぁーっ、暖かーい!! 本当に久しぶりだねえ!!」
妹との再会に喜ぶ姉。だが、肝心の妹は――

「むぐっ……姉ちゃん……苦し……」

抱きしめられてる際に、気管を圧迫されているのか、ジタバタと手足を動かしながらもがいている。

「あっ、ごめんごめん。」

女はすんなりとグレイを離れた。

「げほっ、げほっ……ひ、久しぶりだね……姉ちゃん……」

グレイは、疲れ切った顔のまま、女に挨拶した。

そんな様子を、俺と未来は啞然とした表情で眺めていた。

「えっと……僕の姉ちゃん、メルって言うんだ。僕と同じ、天使の血が混じった吸血鬼だよ。」

グレイは自身の姉を紹介してくれた。

「どうも、佐川紅丞です。」

「安藤未来です。」

俺と未来は同時に頭を下げた。

「あっ、別に、敬語じゃなくて良いよ。私、敬語あまり好きじゃないし。」

メルは恥ずかしそうに答えた。

「……で、 그레이。」

「何？姉ちゃん。」

「どっちが 그레이의 파트너なの？」

メルは俺と未来を交互に見ながら質問した。

「えっと……紅丞が、僕のパートナーで、未来ちゃんが、アカツキのパートナーなの。」

「へーえ……。」

それを聞き、メルは俺に歩み寄った。

「いつも妹がお世話になってるね。ありがとう。」

そう言いながら、メルは俺に手をさし出した。

「あっ……ああ。」

俺も素直に手をさしだし、メルと握手した。

「……ところで、姉ちゃん。どうしていきなり紅丞の家に来たの？」

그레이が1番気になっていることを聞いた。

「それがね……。」

メルは俺を見ながらこう言った。

「あなたの事で、ちょっと話があってね。」

え？……俺の事？

姉（後書き）

メルは今作ではあまり登場しないです。むしろ、次作で結構出てくるので、メルの紹介はそっちで行います。

謝罪

「話の前に……ごめんなさい。妹の不注意で、あなたをこんな姿に
してしまつて……私からも謝るわ。」

そう言いながら、メルは深く頭を下げた。

「いや、顔上げてくれよ。何も、グレイだけが悪い訳じゃない、つ
ていうか、大体俺のせいだから……。」

メルは申し訳なさそうに頭を上げた。

「妹から一応話は聞いたけど……確か、3割は人間……なんだよね？」

「ああ、グレイがそう言つてた。残りの3割は臓器の事だつて……。」

「そっか……。」

「でも、それがどうかしたのか？」

「いや、ちよつと言いつらいんだけど……。」

躊躇しつつも、喋り始めようとするメルを、グレイが止めた。

「姉ちゃん、待って。それは……言っちゃだめだと思う。」

「え、でも、言っておいた方がいいと思うんだけど……。」

メルは相当戸惑っているようだった。

「……ちよつと待ってくれ、言いつらいことつてなんだよ？ 気にな
るじゃないか。」

「いやっ、紅丞は気にしなくていいよ。ちよつと、席、外してもら
つてもいい？」

「え？ 何でだよ。」

「いいから……姉ちゃん、先に未来ちゃんに話してて。」

グレイの言葉に、メルは小さく頷いた。

「ほら、ちよつと向こう行つて。」

グレイは俺の手を引っ張る。――俺は引きずられるようにリビンググ
を出た。

「おい、グレイ……ちょっと待って。」

俺はグレイに、無理矢理部屋に連れてこられた。

「紅丞、その……姉ちゃんが言おうとしたこと、僕から説明させてもらってもいいかな？」

グレイは寂しそうにそう言った。瞳は青色だった。

「別にいいけど……そんな衝撃的な話なのか？」

「うん。……紅丞が天使になった時さ、僕、”残りの3割は、臓器のことかもしれない。”って言ったでしょ？」

「ああ。確かにそう言った。」

「何か、おかしいとは思わない？」

「別に……どこもおかしいなんて思わないが？」

「本当に？ 良く思い出してみてよ。」

うーん……残りの3割が臓器なのが、そんなに変なのか？

悩んでいると――

「紅丞、もしかして、”臓器全てが人間のまま”だと思ってる？」

グレイが、恐る恐るそう訊いた。

「………え？」

「え、だって……違うのか？」

「……違うよ。」

「ちょっと待て、どういうことだ？ 俺、まさか、嘘をつかれてたのか？ もしかして、俺の臓器、全部天使なのか？」

「落ち着いて、紅丞。ちゃんと説明するから。」

グレイはその場で深呼吸をし、俺の目をまっすぐ見ながら語り始めた。

「紅丞の身体は、僕の血の影響で、見た目はほぼ完璧に天使になってしまったけど、臓器は別。でも、臓器全てがたった3割なんて、おかしいとは思わない？」

「……もうわかってるかもしれないけど、紅丞の身体に残る3割の要素は、臓器のほんの一部……正確には、心臓、肺、脳の3つだけなんだ。」

軽い説明。…でも、俺には一方的なマシンガントークに聞こえた。臓器の、ほんの一部……俺には…今の、佐川紅丞の身体には、それしか残されていない。

「何で……。」

「…紅丞？」

「何で、昨日、言ってくれなかったんだよ…？」

俺、ずっと、臓器全てが人間のままだと思ってたんだぞ？それなのに…ショックが大きすぎる……。

「……ごめんなさい。」

グレイは、今にも泣きだしそうな声で謝罪した。

「謝って済む話じゃないだろ……。」

その時――

「うっ……。」

身体に電流が流れる感覚。思わず、両腕を抑えながらその場に膝をつく。

そして、身体が縮み始めた。

「紅丞っ!？」

グレイが俺の身体に触れる。でも、収縮は止まらない。

「どうしょっ……ちよっと待ってて!!」

グレイは俺を置いて、勢いよく部屋を飛び出していった。

涙

「未来ちゃんっ!!」

リビングで、メルから話を聞いてると、 그레이が階段を下りてきた。

「 그레이、一体どうしたんだ?」

그레이はかなり焦っているようだった。

「紅丞がっ……紅丞が縮み始めた!!」

「「えっ!?!」」

俺とメルは同時に声を上げた。

「速く!! 急いで来て!!!!」

俺は 그레이と一緒にリビングを飛び出し、階段を駆け上がった。

部屋に到着し、勢いよくドアを開けると、紅丞先輩が部屋の真ん中で扉に背を向けるようにしてうずくまっていた。――身体が 그레이よりも小さくなっていた。

「紅丞先輩!!!!!!!!!!」

後ろから駆け寄り、肩に触れる。

収縮が――止まった。男の状態でも大丈夫なようで、少し安心した。

先輩の身体は、小学生よりも小さい、赤ちゃんぐらいの大きさしかなかった。

「先輩……。」

俺は後ろから先輩を抱きしめる。……男同士だとか、そう言うのは眼中になかった。

「未来……。」

先輩が俺の名を呼ぶ。

「……何も言わなくていいです。何が言いたいのかは大体わかりますから……。」

そう、恐らく、 그레이から臓器の事について聞かされたのだろう。

俺も先ほどメルから聞いた。

：確かに、今の先輩にはショックな事なのかもしれない。こんなに縮んでしまったのも頷ける。

「ううっ……。」

先輩は俺の腕にしがみ付き、悔し涙を流していた。

励まし

「未来、お前から呼ぶなんて珍しいな？」

「ああ。もう昼過ぎだっていうのに、全然暁文が来ないから、ちょっと不安になって…。」

「あー…：昼過ぎまで寝てたんだ。悪かったな。通りで腹が減ってるわけだ。」

暁文は、そう言いながらリビングへと歩いて行った。

あの後、紅丞先輩を元の大きさに戻すため、念のために女になった方がいい、ということ、急遽暁文に来てもらった。

暁文は暁文で来るの遅いし、先輩も先輩で、暁文に小さい姿を見られるのは嫌だと言うし、もうわけわかんなかった。

「じゃ、せっかく呼んでもらったんだし、とっとと始めるか。」

そう言うのと、暁文は俺に近付き、肩を抑え、噛み痕に歯を刺した。

「うっ…：なあ、暁文、今日は少し急いであるから、出来れば性別が変わったらすぐ離してくれないか？」

「ん…解った。」

暁文は軽く返事をする、ふうーっと息を吐ききり、一気に吸い付いた。

「うあっ…：！？」

あまりの出来事に、声が出ない。

…：苦しい。心臓が飛び出そうなくらい鼓動を速めている。

「あ…：暁文…：も、少し、ゆっくり…。」

なんとか声を絞り出す。

すると、暁文が吸血を中断した。

「…：急いでるんだったら、と思ってやってたんだが…。」
そう言いながら首を傾げる暁文。

「…そこは普通でいい…。」

俺は呆れながら答えた。

「……解った。」

暁文は、今度は優しく吸血してくれた。

性別が完全に切り替わると、暁文は私を離れた。

「……なんか、今日はやけに優しくない？」

「ああ。今日は昼までぐっすり寝ることができたから、気分がいいんだ。」

……確かに、私が家にいるときは、朝はいつも暁文を叩き起こす事から始めていた気がする。なるほど、そういうことか。

「じゃ、グレイを呼んでくるね。」

私はリビングを出て、紅丞先輩の部屋へと向かった。

「紅丞先輩、お待たせしました。」

先輩は、部屋のベッドの上でグレイと一緒に私を待っていた。

「未来ちゃん、遅かったね。」

「ごめん、暁文の吸血が長くて……グレイ、暁文が下で待ってるよ。」

「はい。」

グレイは元気に応えると、私の横を通り過ぎ、部屋を出ていった。

「さて…。」

先輩を元の大きさに戻すため、私は先輩に近付く。

「……なあ、未来。」

「何ですか？」

「いつも、ごめんな……俺なんかのために…。」

先輩はさっきから元気がなく、瞳が青いままだった。……恐らく、臓器の話をまだ受け入れられないのだろう。

「いえ、私はただ、恋人に対して当然のことをしているだけです。」

先輩の頭を撫でながら答える。――天使は、頭を撫でられるのが好きだと、グレイから聞いた。

「……ありがとう。」

瞳の色が青からピンクにかわり、目が徐々に涙目になっていく。

「先輩、前向きに考えましょ？……たった3割でも、先輩の中に人間の要素があることには変わりないんですから。」

語りかけるように囁く。

「未来っ……。」

先輩の目から涙が零れた。

私は先輩を抱きしめる。……軽い。こんなに軽くていいんだろうか。

「……先輩、暖かいですね。」

「天使だからな……。」

「私、少し不謹慎かもしれないんですけど、先輩が天使になって、ほんの少し感謝してるんですよね。」

「え？……どういう事だよ？」

「だって、そのおかげで、こうやって常に一緒にいることができるんですから。」

「そう……かもな。」

先輩は少し嬉しそうに答えた。

私は先輩を抱いたまま、キスをした。

ドクンッ――先輩の身体が、正確には心臓が、大きく脈打ち、成長を始めた。

羽―その2（一部性的表現注意）

「ふう……。」

身体の大きさが元に戻り、未来は俺を離れた。
その瞬間――

「いいねー、青春だねー。」

後ろから聞こえた声に、俺と未来は音速を超える速さで振り向いた。
そこには、俺たちを部屋の入り口からニヤニヤしながら眺めている
メルがいた。

「メル！？……何時からそこに！？」

未来が驚きの声を漏らす。

「何時からって……キスする、20秒前くらい？」

メルは指を顎にあてながら答えた。

……見られた。キスしてるところを見られた。めっちゃ恥ずかしい
……。

恥ずかしいと思う気持ちは未来も同じだったようで――

「あ、あの、メル……できれば、暁文たちには内緒にしてほしいん
だけど……。」

赤面しながらメルに頼み込んでいた。

「解ってるよー。」

解ってるとは言いつつ、ニヤニヤしっぱなしのメル。……本当に内緒
にしてくれるのだろうか？

「まあそれはいいとして……未来にちょっと面白いことを教えてあ
げようと思ってね。」

「面白い事？」

「そう。」

メルは未来に近付き、何かを耳打ちした。

……………。

「え!？」

その瞬間、未来は今までにない驚きの表情を見せた。

「そ、そうなの？」

未来は驚いた顔でメルに尋ねる。

「うん。天使はみんなそうみたいだよ？」

メルはニヤニヤしたまま答える。

「へえ……………」

未来は驚いた顔のまま、俺を見た。

「な、なんだよ？何の話をしたんだ？」

めっちゃ気になる。

「それは、その……………」

未来にしては珍しく、言うのを躊躇っているようだった。

「紅丞っ、羽、出してみて。」

未来よりも先に、メルが俺に指示を出した。…………心なしか、目が輝いているように見える。

「え、なんで羽？」

「いいから、ほらっ。」

「…………解ったよ。」

渋々服を脱ぎ、羽を出す。

「えーと…………えいつ。」

メルは俺の羽にゆっくりと手を伸ばすと、いきなり羽をつまみ上げた。

その時——

「うあっ!？」

身体中に電流が流れる感覚がした。でも、身体は縮まなかった。

「え…………？」

身体が縮むときは、電流が流れる感覚がした後、言葉に言い表せないような恐怖に襲われるのだが、今のは違った。

何て言うのか……言葉に言い表せないような快感のような何かが今の俺にはあった……ような気がする。

「な、何だ？今の……。」

哑然とする俺。

「ほらね？」

そんな俺を後目に、未来に向かって微笑むメル。

「う、うん……。」

困ったような、驚いたような顔をする未来。

……一体どうなってるんだ？

「実はね……。」

メルは俺にそっと耳打ちした。

……………。

メルから聞いたその言葉は、信じられないものだった。

——天使は皆、羽に”あるもの”がついていると言われている。

老若男女問わず、それは同じらしい。

そして、その”あるもの”とは……

性感帯。

……いや、俺だって、自分が何言ってるのかわかんねえよ。初耳だし、グレイはそんなこと一言も言っていなかったし。

「な、なんで、そんなものが羽に……？」

「解んない。グレイも羽に性感帯があるらしいけど、何であるのかは解らないらしいよ？」

メルは腕を組みながら答えた。

「それにしても……不思議ですね、羽に性感帯があるなんて……。」
今度は未来が、俺の羽を指で軽く突いた。

「あうっ……！」

上擦った変な声とともに、俺の身体がビクッと痙攣した。

「あっ、すみません。」

未来は慌てて俺から手を離れた。……心なしか、笑ってるように見えるのは気のせいだろうか？

「……でも、こんなで生活に支障は出ないのか？」

「出ないらしいよ？グレイが言うには、だけど。」

「メルには羽は無いのか？」

「無いよ。私は、グレイとは腹違いの姉妹なの。グレイの場合は、母親が吸血鬼と天使のハーフで、父親が天使なんだ。で、私は、母が普通の吸血鬼なの。」

……簡単に言うと、グレイの中には天使の要素が7割混じって、私の場合は5割。だから、見た目や中身に結構な差が表れてるんだ。ほら、私、感情で瞳の色が変化したりしないでしょ？それに、グレイと違って、太陽にも弱いんだよ。」

メルはハキハキと笑顔で説明してくれた。……なるほど、通りで、コートを着てきたわけだ。

「だから私は、羽が無いからこういう風になることもないんだよっ。」

メルは素早く俺の後ろに回り込み、いきなり両手で両羽をつまみ上げた。

「んあっ……！！！」

またしても変な声が出た。

「あっははは。面白いねえー。」

メルは子供のように笑いながら、俺の羽をいじりまくる。

「あうっ……や、やめろっ……！！！」

堪えられなくなり、上半身裸のままベッドを飛び出す。

「待ってよ、紅丞えー。もう少しだけー。」

メルは両手を前に突き出し、ニヤニヤしながらジリジリと歩み寄ってきた。

「やめろって！意味わかんねえよ！！」

メルから逃げるように後ずさりしながら答える。

そんな中、未来は――

微笑みながらその光景を眺めていた。

「……おい、未来！何とかしろよ！！」

「いや、楽しそうだなーと思いついて…。」

「これのどこが楽しそうなんだよ！！」

反論していると、メルが素早く俺の後ろに回り込み、俺を羽交い締めにする。

「捕まえたあーっ。」

「うわあああっ！！」

その後、メルに散々羽を弄ばれたのは、言うまでもない。

怒り

「……メル、そろそろいいんじゃない？」

「そうだね。」

メルはゆっくりと先輩の羽から手を離した。

「はぁ……はぁっ……」

息を切らしながら、先輩はその場にへたり込む。

先輩は、メルに散々羽を弄ばれ、疲れ切った顔をしていた。

……にしても、紅丞先輩って、結構可愛らしい声出すんだなぁ……なんか意外だ。

こう言うのを、”萌え”って言うんだっけ？……私には解らないけど。

「……………」

先輩は無言でベッドに走り、その上に置いてあった衣服を分捕ると、素早い手つきで服を着た。

「あっ、紅丞え、何で服着ちゃうの？」

メルが少し残念そうに訊いた。

「弄られたくないからだよ！！！」

紅丞先輩はメルを睨みながら答えた。……かなり怒っているようだ。瞳が赤い。

「もー、そんなに怒らないでよ。ただのジョークじゃん。」

メルは頬を膨らませながら呆れたように答える。

「あれのどこがジョークなんだよ……」

先輩は怒り心頭のまま呟いた。

「ま、まあ、良いじゃないですか。メルだって悪気があってやったわけじゃないですし……」

私は咄嗟に宥めようと声をかける。

「……止めなかった癖に。」

紅丞先輩の呟きに、言葉がでなかった。

「そ、それは、その――」

何か、何か言わないと……。

「先輩の嫌がる声が可愛くて……つい……。」

思わず本音を言ってしまった。

「えっ……あ、ありがとう。」

先輩は、少し頬を赤くしながら、答えてくれた。……つか、何故お礼？

「んじゃっ、私、そろそろ帰るわ。」

暫くの沈黙の後、メルがいきなりそう言った。

「え、もう帰っちゃうの？……もう少しゆっくりして行けばいいのに。」

「ごめん、未来。私にも都合があるのだよ、都合が。」

メルは寂しそうに答える。

「それじゃ、またね。」

笑顔で手を振り、颯爽と部屋を出ていった。

「よ、良かった、助かった……。」

先輩は少し安心したようで、小さくため息をつきながらベッドに座った。

「……先輩、”助かった”って言い方はないんじゃないんですか？」
軽く先輩を睨む。

「だって、羽いじってきたし……未来は助けてくれなかったし……。」
先輩は目を逸らしながら呟く。

「ですから、それは、先輩の嫌がる声が可愛かったからであって……。」

「だからってなあ……。」

先輩は私に背を向けてふてくされてしまった。

——先輩の背中……私も実は、少しだけあの羽に興味がある。
私は後ろから先輩に近づき、服の上から羽に触れた。

「ひゃうっ!!」

先輩が、また可愛らしい声を出した。

「未来っ、お前まで何するんだよ!？」

物凄く驚いた表情で、先輩が私を見ている。

「いや、その、ちょっと出来心で……。」

だ、ダメだ、笑いが堪えられない。

「未来、お前、何笑ってんだ？」

「す、すみません、ちょっと可笑しくって……あははっ……だって、
”ひゃうっ!!”って……。」

「お前なあっ……。」

「すみません、もうしませんから……あはははっ……。」

その後、怒り心頭な先輩を後目に、私は終始笑っぱなしだった。

2度目の夕飯

夜。

先輩の機嫌も治り、ようやく夕飯へと漕ぎ着けた。

今日のメニューは、先輩を上機嫌にさせるため、ハンバーグにした。

……先輩は、昨日とは違い、そりゃあもう笑顔で、瞳を綺麗なピンク色にして、箸を進めていた。

「美味いっ!!」

何口か食べては、感想を言う先輩。なんか、見てて面白い。

「ありがとうございます、先輩。」

瀬夏が天界に帰ってから、なかなか自分の料理を振る舞う機会がなかったから、正直言っていると嬉しいが、少し恥ずかしい。

ふと、そんな先輩を、離れたソファから心配そうに眺める 그레이が目に入った。

「 그레이、どうかした?」

私がそう訊くと、 그레이は首をぶんぶん横に振った。

「何でもない、気にしないで。」

そう言うと、立ち上がり、逃げるようにリビングから出て行った。

……何だろう?

焦り

僕は誰もいないキッチンに向かった。

「……カラス、ちょっといいかな？」

広いキッチンの奥の方に行き、隅っこに立ってカラスを呼んだ。

もう日が沈み、夜になっているため、僕の背中にはそれなりに大きな羽が出現している。

その羽から、球体の形をしたカラスが勢いよく飛び出した。

そして、僕の周りで何度か浮遊し、目の前でいつもの少年の姿になった。

「なんだ？グレイから呼ぶなんて珍しいな。」

「うん……ねえ、カラス。紅丞の事なんだけど……。」

「……またその話か。もうこれ以上詮索するなって言っただろ。」

そう言いながら、カラスは僕の羽に手をかざし、再び羽に戻ろうとする。――僕は素早くその手を掴んで止める。

「んっ……なんだよ？」

カラスが少し驚いた顔をした。

「ねえ、カラス……本当に、紅丞がカラスの事を思い出さないと、元に戻してくれないの？」

「だから、そうだって言ってるだろ？いいから手え話せよ。」

「嫌だ。……じゃあもしも、紅丞がこれから先、何十年も思い出さなかったら、ずっと紅丞は天使のままなの？」

「……そんなことない。」

「どういう意味？」

「紅丞は、絶対思い出してくれる。俺にはわかる。」

「根拠は？」

「根拠なんて無えよ。悪魔は天使同様、勘がいいんだ。そうだな……多くて、あと1ヶ月の間に、紅丞は俺の事を思い出してくれると断言できる。」

「……それ、ただの勘でしょ？根拠が無いくせに、断言なんてしないでよっ…。」

だんだんと、声が涙声になっていく。

「グレイ、お前……。」

カラスが心配そうに僕を見つめる。

「カラス、約束してほしい。」

僕はカラスの肩を掴み、自分と対面させる。

「1ヶ月経っても、紅丞がカラスの事を思い出さなかったら……紅丞を人間に戻してほしい。」

涙が頬を伝う中、僕はカラスに懇願した。

「グレイ……でも——」

「いいから、何も言わずに約束して。……じゃないと、僕、カラスの事嫌いになるから。」

僕の言葉に、カラスは下唇を噛みながら小さく頷いた。

2日目の吸血

夕食も済み、リビングのソファでまったりしていると――

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴った。

「ちょっと見てきますね。」

未来が早歩きで玄関へと向かう。

数秒後、未来が暁文と一緒にリビングへと入ってきた。

「こんばんは、紅丞さん。」

「ああ、こんばんは。…… 그레이呼んでくる。」

俺はリビングを出て、 그레이を探しに行った。

「どこ行っただんだー……？」

独り言のように呟きながら 그레이を探す。

：俺の部屋にはいなかったし……キッチンかな？

とりあえずキッチンへと向かう。

キッチン到着。扉を開けようと手を伸ばした――その時。

「約束して。1ヶ月経っても、紅丞がカラスの事を思い出さなかったら、紅丞を人間に戻して。」

それを聞いた瞬間、俺は伸ばしていた手を引っ込めた。

……え？今、なんて言った？

俺が、カラスの事を…？

そして――

「いいから、何も言わずに約束して。じゃないと僕、カラスの事、嫌いになるから。」

確信した。

今、グレイはカラスと話している。

じゃあ、今、俺がこの扉を開け放てば、カラスの姿を拝める……ってわけだよな？それが、カラスの”思い出してほしいこと”の手がかりになるかもしれないし……やってみっか。

俺は勢い良く扉を開け放った。

キッチンの奥、隅のほうで、壁に向かうような形で、グレイが立っていた。

「紅丞……。」

グレイがゆっくりと振り向く。

その顔は、今にも泣き出しそうな表情だった。瞳の色は、青。

「どうしたの？紅丞。」

そんな表情で優しく質問され、俺は思わず本来の目的を忘れそうになっていた。

「え、いや……えっと……今、暁文が来たぞ。そのことを伝えようと思ってる……。」

「そつか。……ありがと、紅丞。」

グレイは青い瞳のまま、寂しそうに笑うと、俺の横を通り過ぎ、キッチンを出て行った。

独り言……では無いんだろうな。多分。

恐らく、グレイと一緒にいたであろう、グレイの話し相手……それはカラスで間違いないはずなんだ。じゃないと微妙に辻褄が合わない。

じゃあなぜカラスは俺の前に姿を現せないのか？……現せないんじゃない、現さないんだ。俺がしっかり思い出すことを思い出せば、カラスは俺の目の前に現れてくれる。

そして、その思い出すべき事は――俺と、カラスにまつわること。

いったいなんだ？俺はその昔、カラスと何かしたのだろうか？相手は悪魔だし、それなら記憶に残るはずだし……。

「ダメだ、わかんねえ。」

1人で考えても埒があかない。そもそもヒントが少なすぎる。

俺は思考を一時中断させ、キッチンを出た。

推理

自分の部屋で1人、未来を待っていると、暁文が気を失った未来を抱えながら部屋に入ってきた。……案の定、暁文とグレイに血を与えて倒れたらしい。

今回は俺のベッドではなく、キッチンと来客用の部屋へ案内し、そのベッドに寝かせるよう指示した。

「ふう……。」

1人、部屋でベッドに寝転がりながら考え込む。

……話を整理しよう。

まず、俺を人間に戻すことが可能なのは、カラスのみなはずだ。あくまで推測だけど。

そして、カラスに会うためには、カラスが思い出してほしいことを俺が思い出さねばならない。

で、その思い出してほしいことが――

「俺とカラスに関すること……だよな。」

独り言のようにぼんやりと呟く。

……不思議だ。天使になってから、妙に頭が冴える。

それでも、解らない。やっぱりヒントが少なすぎる。

「グレイに聞いてみるか……。」

あいつ、結構優しいし……訊いてみれば、1つくらいヒントを落としてくれるはずだ。

「んしょっ。」

俺はベッドから起き上がり、部屋を出た。

悲痛

未来ちゃんを部屋に運び終えた後、僕とアカツキはしばらく一緒にリビングにいた。

2人で会話中、紅丞の話になった。

「――で、紅丞さんのほうはどうなんだ？」

「それが全然……本人がまったく危機感感じてないみたいで……」

「そりゃあ、自分が天使になったなんて、にわかには認められないよな……」

「いや、天使になったことは認めてはいるみたいなんだ。ただ……」

「ただ、どうしたんだ？」

「……僕さ、”紅丞がカラスのことを思い出せば、カラスは紅丞を人間に戻してくれる。”……って言ったよね？」

「ああ。で、紅丞さんが自然に思い出すまで、そのことは内緒……なんだろ？」

「うん……でも、一応ヒントは与えたんだ……」カラスが思い出してほしいことがある。”……ってだけ……」

「それ、少なすぎないか？」

「僕もそう思うんだけど、カラスが”それ以上言ったら紅丞を人間には戻さない”……って……」

段々と声が涙声になっていく。

「グレイ……」

アカツキが心配そうに僕の顔を覗き込む。

「……ねえ、アカツキ……僕、どうしたらいいんだろう……？」

涙が頬を伝う。――もう、堪えられない。

僕はたまらず、アカツキに抱きついた。

「僕の所為だ……僕がちゃんと血の管理をしていれば、こんな事には

ならなかったの……。」

「……………」

泣きながら後悔の言葉を並べる僕の頭を、アカツキは無言で撫で続けてくれた。

後悔

言葉が、出なかった。

グレイにもう少しヒントを貰おうと思い、リビングに行こうとしたが、

暁文がいたため、盗み聞きしながら話しかけるタイミングを計っている、

突如グレイが泣きだし、後悔し始めた。

本当に、言葉が出なかった。

——なんで、グレイは悲しんでるんだ？” 僕の所為だ” って、どう言うことだ？

グレイは何も悪くない。むしろ悪いのは俺だ。俺がグレイの血を勝手に飲んだりしなければ、こんなことにはならなかったはずなのに……。

事態は思った以上に深刻だった。

俺が天使になった……その事で、俺は多くの関係者に迷惑をかけている事になる。未来にも、暁文にも、そして、グレイにも……。

俺自身、まったく危機感を感じていなかった。

「つ……。」

情けない自分に腹が立ち、思わず下唇を噛む。

そして、俺は家を飛び出した。……今は、あの家にはいたくないと、そう判断した。

最低だ。俺は、最低な——^{天使}人間だ。

後悔（後書き）

以前から溜めていた物を投稿していたため、こんなに早く投稿できたのですが、この話を最後にストックが無くなりました。こっから更新が不定期になるかもです。

桜と猫と記憶

「はぁっ……はぁ…。」

家を飛び出し、必死で走った。

着の身着のまま出てきたので、帽子をかぶっていない。羽は服で隠れているとはいえ、青い髪を誰かに見られたら大変だ。

家の近くの公園——桜公園にたどり着いた。

4月とはいえ、まだ桜は開花してはいなく、あと数週間で開花するくらいまで蕾が膨らんでいた。

「……………」

公園の中にあるベンチに座る。

……家を飛び出したまでにはいいが、これからどうしようか…財布も携帯も無い。本当に手ぶらで出てしまったからなあ…。

「はぁ…。」

思わずため息をこぼす。吐く息が白くなった。

「…寒くないー……。」

天使だからか、寒さを感じない。吸い込む空気も、冷たくもなんともない。

「畜生っ……。」

ベンチの上で膝を抱えて顔をうずめる。

戻りたい……今すぐ人間に戻りたい…。もう誰にも迷惑なんかかけたくないっ……。

「喉渴いた…。」

公園には水飲み場は無い。でも、家には帰りたくない。

「あぁーっ……。」

呻きながら夜空を見上げる——と、ここである事に気が付いた。

身体が、縮んでいない。

さっきの俺の心情からすると、絶対縮んでもおかしくはないはずなのだが……。

試しに立ち上がってみたが、服のサイズはぴったりだった。

「何で……？」

もしかして俺……打たれ強くなったとか？

いやいやいや、それはないだろ、絶対。

「…ま、いいか。」

とりあえず再びベンチに腰を下ろす。

「どーすっかな…。」

その場で公園を見渡す。

桜公園は、さっきも言ったが、俺の家のすぐ近くにある。だから、小さいころはよくこの公園で遊んでいた。

今は桜の木が大量に植えられているのだが、俺がまだ小学生だった頃は、小さいがしつかりとした遊具があった。そのころは桜の木は4本ぐらいしか植えられてなかった。

その遊具が撤去され、その場所に桜の木が大量に植えられ、今の桜公園になったのだ。

……確か、遊具が撤去された次の年は花見客が多くて、この公園で遊ぶ子供は激減してしまったような気がする……俺はそれでも遊んでたけど。しかも1人で。

そういえば昨日、 그레이が、俺が昔どんな子供だったか気にしてたな……。

月日が経つにつれ、昔の記憶というのはどんどん薄れていく。…俺はまだ高校生だが、小学校の頃の自分がどんな自分だったか、半分忘れかけている。

昔の俺なあ……未来程ではなかったが、好奇心旺盛で、とにかく何

でも後先考えず挑戦する子供だった気がする。

例えば：”早朝に桜公園に行ったら何かしてみる”、とか。
今思えば、当時の俺何やってたんだとツツコミたくなるが、当時の俺にとって”早朝”っていうのは、とにかく見るものすべてが幻想的に見えて、楽しかった記憶がある。

なんていうのか……ほら、普段朝9時ぐらいに起きる人が、朝6時ぐらいに偶然目が覚めたら……なんかテンション上がらない？見るものすべて幻想的に見えない？

当時の俺はそう言う思考の持ち主だったってことだ。

ちなみに、早朝の桜公園に行って、何をしたのか、っていうと――

「……あっ？」

瞬間、俺は変な声をあげてしまった。

あの日……俺は何を見た？

思い出せない……いや、あと少しで思い出せそうだ…。

俺は立ち上がり、当時、早朝の桜公園で遊んでいた場所へと向かった。

たどり着いたのは、水飲み場——の跡地。

遊具が撤去されたのと同時期に、水飲み場も撤去されたのだ。

確か、俺はここで、水遊びをしていたはずだ。早朝、1人で。

ちなみに、その時の季節は夏だったので、寒くもなともなかった。

「んー……？」

水飲み場跡地を目の前に、顎に指を当てながら考える。——何か引っかかる。

試しにその場で四つん這いになり、当時の目線を再現してみる。
その瞬間——

ガササツ

「わっ!?!」

近くの草むらから物音がし、俺は反射的に素早く立ち上がった。数秒後、草むらから「にゃあ」という声がし、真っ黒な野良猫が現れた。

「なんだ…猫か…それにしても、黒猫なんて不吉だな…。」
そう言いながら、近寄ってくる人懐っこい野良黒猫を軽く撫でる。

「あっ!?!?!」

何度か撫でた後、俺は思わず大声を出してした。驚いた野良猫は草むらへと逃げてしまった。

早朝…公園…そして、黒猫。

思い出した。何もかも、全て……思い出した。

俺は走り出し、全力疾走で家へと向かった――。

急遽

「グレイっ！！！」

アカツキが帰った後、しばらくリビングでぼーとしていて、いきなり紅丞がドアを勢いよく開けて入って来た。

「わっ！？ど、どうしたの、紅丞！！！？」

「グレイ……今、ちょっといいか？」

紅丞は息を切らしながら僕の元へと歩み寄る。心なしか、表情がいつもよりも真剣に見える。

「いいけど……どうしたの？」

「思い出したんだ……カラスの事。」

紅丞はソファに座りながら、確かにそう言った。

「ほ……本当！？」

「ああ、今からそれを話すから……聞いてくれるか？」

その言葉は、僕にはなく、僕の”羽”……カラスに向かって言っているような気がした。

カラス

今から大体11年くらい前——佐川紅丞、当時7歳。

好奇心旺盛だった彼が、唯一興味を示したのが——早朝。

早朝に色々な事をするのが、ある意味では、彼の1つの趣味だった。夏のある日、その日はちょうど夏休み。彼は前日、9時という物凄く早い時間に就寝し、明日の早朝に備えていた。

そして、当日。早朝5時。

両親はまだ起きていない時間、彼は半袖短パンといういかにもラフな格好で家をこっそり抜け出し、桜公園へと向かった。

桜公園の水飲み場に到着し、適当に蛇口をひねる。

誰もいない、朝霧が少し出ている公園で、彼は人知れずはしゃいでいた。

すると——

ガサガサッ！！

物凄い物音と共に、近くの桜の木から何かが草むらに落ちた。

「!？」

彼は驚き、慌てて逃げ出した方がいいが、途中で足が纏れて転んでしまった。

「……うわあああん……。」

男児とはいえ、まだ5歳。膝を擦りむき、その痛みで泣き出してしまった。

すると——

ガサガサッ

木の近くの草むらから物音がし、何かが現れた。
その何かとは――

猫。

一言に猫と言っても、その大きさは普通の猫の比ではなく、なんというか……その辺の動物園にいるライオンや虎よりもでかかった。体長は、3メートルはあった気がする。

そして、黒かった。まるで、身体全体に真っ黒な布をかぶせたような……瞳の色も、何もかもが黒。猫というより、猫の形をした影と言った方がいらいだった。

「え……?」

彼は驚いた。そりゃあもう、泣き止んじゃうくらい。

猫はゆっくりと彼に近付く。

「あ……」

彼は咄嗟に、立ち上がって逃げようとしたが、腰が抜けてしまって立ち上がれない。

ついに、猫が彼のすぐ目の前まで迫ってきた。

猫はその大きな口をゆっくりと開け、彼の膝の擦り傷を数回舐めた。
そして――

「男なんだから、もう泣くなよ、紅丞。」

低い、男の声で、確かにそう言った。巨大な猫が、人の言葉を喋ったのだ。しかも、自分の名前を知っている。

疑問点が多すぎて、啞然とする彼を後目に、猫はゆっくりと後ろを振り返り、いつの間にか濃くなっていた霧の奥へと向かうと、吸い込まれるように消えてしまった。

それ以来、彼は早朝に家を出ることを辞めた。……流石に、巨大な人の言葉をしゃべる黒猫は恐ろしかったようだ。

でも、今ならわかる。恐らく、あの猫こそ、魔王——カラスで間違いないのだ、と——。

カラス（後書き）

語り部は一応、紅丞って事になっています。

答え合わせ

俺は一通り話終わると、まっすぐグレイを見た。

グレイは、少し複雑な表情をしている。

「……グレイ、どうなんだ？ 正解か、不正解か？」

「どうなんだって言われても……。」

グレイは戸惑いつつ羽を広げた。

すると、グレイの右翼から真っ黒な影のような球体が出現した。

「「あっ！！」」

俺とグレイは同時に声を上げた。

球体はグレイの周りを浮遊し、その近くで形を変えた。

そして、1人の、少年の姿になった。

「あ……。」

啞然とする俺。

「カラス！ 出てきてくれたんだ！！」

グレイは感激のあまり、立ち上がり、少年——カラスに、抱き着いた。

「紅丞……やっと思い出してくれたんだな……。」

カラスは、グレイに抱き着かれながらも、俺に向かって微笑んだ。

「あ、ああ……。」

俺は啞然としながらも、何とか返事を返した。

ヤバイ、開いた口が塞がらない……。

昨日、グレイから、”悪魔は、人間界で、自分の姿の元ネタを探し出して、それを元に姿を作る”と聞いた。

その話は本当のようだ……どうしても、認めざるを得ない。

だって、カラスの姿は——紛れもなく、当時の7歳の俺そっくりだったんだから。

理由（前書き）

今回は会話多めです。

理由

「ど、どうして……?」

やっと出た俺の最初の言葉は、それだった。

「どうしてって……なにがだ?」

「いや、だから、どうして俺の姿なんだよ?」

「ああ……そりゃ、あの日の紅丞の姿をそのままコピーしたからであって——。」

「そう言うことじゃなくて!!……なんで、俺なんだ?他の人間でもよかったじゃないか?」

「うーん……だって、顔立ちいいし、いつか再会した時に驚くかなーとか思ってた?」

「…それ、他の人間にも言えることじゃね?」

「いや、俺はこれがよかった。……ていうか——グレイ。」
「何?」

「お前はいつまで俺にくっついてるつもりだ?」

グレイは先ほどからカラスに抱き着いたままだった。

「お前、まさか、アカツキよりも俺の事を——」

「っ!!! なわけないじゃん!!!!!!」

グレイは大声を出しながらカラスから離れた。

「冗談辞めてよ、カラス……僕はアカツキ一筋だよ。」

「ふーん……ま、そう言うことにしておくか。」

カラスはそう言いながら、ソファに座った。

「……なあ、カラス。」

「何だ?」

「お前は…俺を、人間に戻してくれるのか?」

「ああ、戻してやる。」

俺からの質問に、カラスは即答した。でも——

「だが、今すぐには無理だ。」

「えっ……。」

「明日は日曜日だ。未来を呼んで、改めて話したいと思う。」

「未来と言えば……カラス。」

「何だ？」

「昨日、未来の髪に見えた影……あれもお前か？」

「ああ、あれは俺だ。」

カラスの言葉に、今度はグレイが反応した。

「え、ちよっと待って、カラスはもしかして、未来ちゃんに寄生したってこと？」

「んー…簡単に言えばそうなる。」

「……どうやって？ 契約もしていないのに……そもそも、未来ちゃん
は人間だよ？ 悪魔は天使か吸血鬼にしか寄生できないはずだけど……」

「俺は悪魔の王だぞ？ 人間にも寄生はできる。」

「でも、契約は？」

「その説明は簡単だ。……グレイ、お前は未来の血を飲んだことがある
だろう？」

「うん、昨日も飲んだ。」

「で、グレイが飲んだ未来の血が、羽にいる俺のところまで届いて
きて、結果、”仮契約”された状態になるんだ。」

「仮……てことは、もしかして、場合によっては紅丞にも寄生する
ことができるってこと？」

グレイの質問に、カラスは普通に頷いた。

「でも、紅丞の場合は今は天使だからな、今は寄生できない。」
言いながら、カラスは立ち上がり、グレイに近づく。

「……じゃ、俺はもう寝る、じゃあな。」

そう言うと、カラスは先ほどの球体の形になり、グレイの羽に戻っ
ていった。

「良かったね、紅丞。カラスの事思い出せて。」

「ああ。本当に良かったよ。」

「……それでさ、紅丞……」

「何だ？」

「僕、”紅丞がカラスの事思い出さない。”って、心のどこかで決めてたところがあるんだよね……できればそのこと、謝らせてほしいんだ……」

グレイは俺の目の前に立った。そして――

「紅丞の事、信じてなくて……ごめんなさい。」

頭を下げて、俺に謝罪した。

「あっ、いや、別にそこまでしなくていいよ。」

俺は慌ててグレイに近付く。

グレイは少し驚いた顔で俺を見上げた。

「……俺もさ、グレイや未来が協力してくれてるって言うのに、全然危機感感じてなくて……本当にごめん。」

今は、カラスの事を思い出すことができ、本当に嬉しいと思ってる。」

言いながら、俺はグレイの頭をそっと撫でてやる。

「紅丞……ありがとう。」

「どーいたしました。……じゃ、俺、風呂入ってくるから。」

俺はリビングを出て、階段を上って行った――。

羽―その3（一部性的表現注意）

風呂上り、自分の部屋へ戻ろうとすると、階段の上から未来が降りてきた。

「…未来、もう身体は大丈夫なのか？」

「はい、しばらく寝たら良くなりました。あの、お風呂入ってもいいでしょうか？」

「ああ、大丈夫だよ。……っていうか、居候じゃなくて、同棲してるんだから、聞く必要無くないか？」

「そ、それもそうですね…では、失礼します。」

未来は軽く会釈すると、俺の横を通り過ぎて行った。

部屋に戻り、電気をつける。

「…あー……。」

周りに誰もいないのをいいことに、俺は勢いよく服を脱ぎ、上半身裸になった。

「あーあ……やっぱり羽が濡れてる…。」

グレイからは一応、羽を濡らさないようにする方法は教えてもらってはいたのだが、それでもやっぱり細かいところは湿ってしまっている。

…思えば、この羽、性感帯があるだけで他一切役に立たないじゃないかねえか。寝る時も邪魔だし。

俺は今天使なんだ。グレイみたいに飛ぶこととかできないのかな？……っていうか、そもそもこれ、どうやって動かすんだ？

羽が生えているのはちょうど肩甲骨の辺り。この辺に力を入れればもしかすると――

「んーっ……。」

試しに頑張ってみる。

バサッ

あれ、今の……羽音？てことは、動かせるのか？

後ろを見てみると、今の衝撃で落ちたのか、床の上に羽根が散らばっていた。

動かせる——みたいだけど、動かした後は床掃除しなくちゃならないんだな、これ……。

「なーんだ、結局邪魔なだけじゃん……早く人間に戻りたいな……。」
落ちている羽根を拾いながら、俺は呟いた。
すると——

「いや、慣れれば役に立つよ？」

「わっ!!?」

部屋の入り口から聞こえた声に、俺は思わず飛び上がってしまった。

「紅丞……驚かせたのは悪いとは思うけど、そこまでびっくりする？」

声の主——グレイは、少し呆れながら答えた。

「い、いや、誰もいないと思ってたからっ……。」

俺は顔を真っ赤にしながら慌てて服を着た。

「そりゃあ、仕方ないけどさ……あ、紅丞、その羽根、できれば欲しいんだけど……。」

「え、なんで？」

「それは内緒。ちよっとね……良いでしょ？」

「…別にいいけど。」

俺は渋々グレイに拾い集めた羽根を手渡した。

「ありがと、紅丞。」

グレイは笑顔で羽根を受け取った。

「…で？俺の部屋に来たってことは、何か用があるんだろ？」

「うん、実は、その羽の事で、ちょっとね…。」

「羽が、どうかしたのか？」

「実はその…姉ちゃんから、聞いた？性感帯の事…。」

「ああ、一応な。」

「あー、聞いちゃったのか…。」

「え、なんか都合悪かったのか？」

「いや、そう言うわけじゃないんだけど、ちょっと恥ずかしくってさ…。」

「ああ…確かにな。」

自分の性感帯が解りやすい部分にあるって、結構恥ずかしいからな…。

「…でも、それならまだいいよ。俺は今日、メルと未来に散々弄られたからな…。」

「え、姉ちゃんが？」

「うん。」

「姉ちゃん…でも、仕方ないかな…姉ちゃんドSだし…。」

「仕方ないで済むのか？あれは…。」

「吸血鬼界にいたころから、姉ちゃんはああたったからね。…じゃ、僕、もう寝るね？」

「ああ、おやすみ。」

「おやすみ、紅丞。」

グレイは笑顔で部屋を出て行った。

睡眠妨害

夜。

恋人の安藤未来から、いきなりこんなことを言われた。

「先輩、今日は一緒に寝ませんか？」

「え、えーっと、どういう風の吹き回しで？」

「先輩、国語弱いのによくそんな表現でましたね……えっと、先輩は昨日、寝てる間に縮んだんですね？」

「確かにそうだな……。」

「ですよ？ だからです。」

未来はそう言いながら、俺のベッドに潜り込んだ。

……気持ちは嬉しいし、俺もできれば未来とずっと一緒にいたいと思ってる。でも、まさかここまでするとは……。

「先輩？ どうしましたか？」

未来は、布団から顔だけ出ししながら、不思議そうに俺を見ている。

「い、いや、その……いいのか？」

「いいのかって、何がですか？」

「だから、えっと……俺なんかで、いいのか？」

「他に誰がいるんですか？」

そりゃそうだ。

「で、でもなあ……。」

「もしかして、先輩、私と寝るのは無理……とか？」

「えっ!?! いや、無理じゃない、無理じゃない……。」

最初の”無理じゃない”は未来に向けて。最後の”無理じゃない”は自分に言い聞かせるように言ったつもり。

「……っていうか、未来は、男と寝るのに抵抗無いのか?」

「うーん……知らない人の場合は、若干抵抗はありますけど、紅丞先輩の場合は、恋人なんで、抵抗はないんですよ。……むしろ、寝てる間に先輩が縮んでしまう方が嫌です。」

未来は真剣な表情で答えた。

「それに、先輩は私と一緒にいれば縮みませんし、私も、先輩と一緒にいれば暖かいですし、ある意味一石二鳥じゃないですか。」

「……それってつまり、俺を暖房器具扱いしてるってことでいいんだよね?」

「え、あ、いや、その……と、とにかくつ、早く寝ましょ? ほらっ。」

未来は笑顔で俺を呼んだ。……行きたくねえー。何故か知らないけど行きたくねえー。

「はぁ……。」

俺は嫌々、ベッドに入った。

睡眠妨害（後書き）

腹
W
W
立
W
W
つ
W
W
W

3日目(日曜日)

朝。

「ふああーっ。」

階段を織りながら、俺は大きな欠伸をした。

「先輩、眠れなかったんですか？」

隣から未来が心配そうに俺の顔を覗いた。

「ん……まあ。」

「睡眠時間足りなかったのかもしれないね……今日はもう少し早く寝ましようか。」

未来は顎に指をあてながらそう言った。

……本音を言うと、昨日の夜は一睡もできなかった。

だってさあ、考えてみてよ。夜中に美人の恋人が寝てるんだぞ？ しかもすぐ隣で。

しかも俺には羽がある所為で仰向けはできないし、うつ伏せはする主義じゃないし、未来に背中を向ければ昼間みたいに羽を弄られるかもしれないし……

なもんで、結局俺は未来の方を見ながら寝るしかなかった。

しかも――

「先輩が縮んでしまうとあれなので、寝てる間は手、握ってますね？」

――なんて言い出したから、もうその時の俺は気が気じゃなかったと思う。

……いや、確かに縮みはしなかったけど、ねえ……。

リビングに行くと、グレイとカラスがいた。

「あっ。」

未来が少し驚きながら俺とカラスを交互に見た。

「……先輩、カラスの事、思い出してたんですか？」

驚きながらそう聞いてきた。……なるほど、グレイと暁文以外にも、知ってる奴がいたってことか。

「まあ、一応な。」

少しドヤ顔で答える。

「そうだったんですか……あ、私、先に顔洗ってきますね。」
そう言うのと、未来は洗面所に行った。

「ふああ……。…」

「紅丞、寝不足なのか？」

欠伸を繰り返す俺を見て、カラスが質問した。

「昨日、未来と一緒に寝ようって言い出してさ……後は察してくれ。」

俺の言葉に、グレイとカラスは顔を見合わせながら「ああ……。…」
と言った。

「そりゃあ、紅丞は純粹で、ウブだもんな、仕方ない。」

カラスが怪しげな笑みを浮かべながらそう言った。……ウブで悪かったな。

3日目（日曜日）（後書き）

ところで、ウブってどういう意味なんだろうね。
例えば意味が違っていても作者は気にしない人です。

作戦会議

朝食を食べ終えた直後、カラスが俺と未来を呼んだ。

「紅丞を人間に戻す事について、話したいと思う。」

カラスの言葉を聞き、空気が一変した。

真剣な空気が漂う中、カラスは説明を始めた。

「……最初に断っておくが、今すぐに紅丞を元に戻すことは不可能だ。」

「えっ……どういうこと？」

未来が慌てて質問した。

「落ち着け、ちゃんと話す。……まず、グレイには今から3日間、人間だった頃の紅丞の血の味によく似た血を集めてもらう。出来るよな？」

カラスはグレイを見ながらそう言った。

「出来る。けど……それ、何に使うの？」

今度はグレイが質問した。

「それはその時になれば教えてやる。」

「今から3日間ってことは、3日後に、紅丞を人間に戻すって事？」

「そう……だな。」

そう言うと、カラスは未来の方を向いた。

「……で、未来は、常に紅丞と一緒にいてほしい。」

「それは……先輩の身体が縮まないように？」

「そうだ。一ミリでも縮んでると、思うようにいかないかもしれないからな。」

「解った。」

未来は力強く頷いた。

……で、

「……カラス、俺は何をしたらいんだ？」

「紅丞は……特に何もなくていい。しいて言うなら、昨日みたいに勝手に家を飛び出していかないでほしいな。」

カラスの言葉に、未来とグレイは同時に「えっ？」と言った。

「紅丞……どう言うこと？」

「先輩……どう言うことですか？」

グレイは少し心配そうに、未来に至っては少し怒っているようにも思えた。

「い、いや、それはその……。」

俺は、グレイの話を盗み聞きしてから、カラスのことを思い出すまでの間の事をすべて話した。

「え、じゃあ、紅丞、もしかして昨日の僕とアカツキの会話聞いたの？」

瞳を真っ青にして恐る恐る質問するグレイ。

「また盗み聞き……ダメだって言ったじゃないですか。」

マジ切れ寸前の未来。

「紅丞、お前……。」

啞然とするカラス。

「……ごめんなさい。」

そして、何故か謝る俺。……いや、何故かは余計か。妙な光景だった……。

疑問究明

俺は常に未来と一緒にいた方がいい。

……ということで、今、俺は寢室のベッドに座っている。隣にはもちろん未来がいる。

確かにこうすれば、俺が縮むことはないのだが……

「暇、だな。」

「暇、ですね。」

とにかく、暇だ。何もすることがない。
すると――

「暇だと聞いて。」

カラスがニヤニヤしながら部屋に入って来た。

「カラス：何しに来たの？」

「別に、俺も暇だったし。」

未来の質問に、カラスは妖しく微笑みながら答えた。

「……それと、紅丞。」

「何だ？」

「昨日、身体の方は大丈夫だったのか？」

「大丈夫だったけど……どういことだ？」

「昨日、紅丞はどうして家を飛び出したんだっけ？」

「その話掘り返すなよ……えっと、 그레이が、俺の事で悲しんでたから、思わず――あつ。」

そう言えば、昨日、俺ははどうして縮まなかったんだ……？

「”どうして縮まなかったのか”：疑問に思ったりしなかったか？」

カラスは、まるで俺の心情を察したかのように、質問した。

俺はそれに小さく頷いた。

「実はな……昨日の夜、紅丞が寝ている間に、ちょっと”術”をかけておいたんだ。」

「術……って？」

「俺は悪魔だからな。そう言うことが可能なんだよ。で、その術つてのが、”天使を縮まなくさせる術”なんだ。……まあ名称は無いから、今はそう言うことにしておくか。」

カラスは俺の目をまっすぐ見ながらそう答えた。

「”天使を縮まなくさせる術”？……そんなのあるのか？かなり便利じゃないか。」

「そう思われがちだが、かけるときに天使の方の身体に負担がかかるから、結局少し縮んじゃうんだけどな。……ほら、昨日、朝起きたら少し縮んでただろ？」

「え、まさか、あれお前の仕業？」

「俺の仕業っていうか……まあそんなとこだな。」

「てことは……未来と一緒にいなくても、俺は大丈夫……ってことか？」

「いや、術の効果は24時間しか続かないから、今はもう術は切れてる。」

「あ、そうなんだ……。」

「それに、さっきも言ったが、術をかけると身体に負担がかかるから、あまりやりたくないんだ。」

「……じゃあなんでやったんだ？」

「そりゃあ、紅丞が縮む速度があまりにも速いから、ちょっと不安になって……。」

カラスは恥ずかしそうに答えた。……ふーん、悪魔にもそう言うところあるのか……。

「……って、ちょっと待って、カラス。」

突如、未来が口を挟んだ。

「何だ？」

「昨日、グレイから臓器の事を知らされた直後、先輩の身体は結構

縮んじやってたけど…あれはどう説明するの？」

確かにそうだ。カラスの術がかかっていたはずなのに……なぜ？

「ああ、あれな……面倒だから詳しい部分は省くけど…簡単に言えば、”術をかけられた対象”は、”術を掛けた対象”の近くにいないという意味がない。…とだけ言っておこう。」

「てことは…なるほど……。」

未来は理解が早いのか、顎に指をあてながらふむふむと納得しているようだった。

「え、ちよつと、未来。俺にもわかるように説明してくれよ。」

「えつと…要するに、先輩が縮んだあの瞬間、カラスは別のところにいたので、術の効果が表れなかった、ってことです。解りますか？」

「うん、一応……。」

「ま、そう言うことだな。んじゃ。」

カラスは後ろを振り向き、部屋を出て行こうとした。

「あつ、カラス。最後にちよつといいか？」

「ん？」

「カラスって、どのくらいの間、グレイと一緒にいるんだ？」

「うーん……グレイが生まれた時から一緒だな。大体そのくらいの時期に契約したし。」

てことは……大体20年はずっと一緒ってわけか。

「当時のグレイは可愛かったぞー。今もだけど。」

物思いにふけるカラス。…でも、何か引かかる。

一体何が……あ、わかった。

「ちよつと待ってくれ、その話、少し矛盾してないか？」

「矛盾って…どこがだ？」

「だって、カラスは20年もの間、ずっとグレイと一緒にいたんだろ？」

「ああ。」

「じゃあ、11年前、俺が見たあのカラスはなんだったんだ？」

「あー……それな。いつか訊かれると思ってたよ。」

…まあ簡単に言えば、11年前は、当時のグレイはまだ10歳かその辺だったことは、解るよな？

で、まだアカツキに会ってなかったグレイは、1回だけ人間界に来たことがあるんだよ。

…：要は、その隙について、人間界での姿を改めて探そうと思って、ちよっと出歩いてたわけだ。

…：知ってるか？悪魔の姿って、場合によっては色んな姿に変えることができるんだぜ？」

カラスは少しドヤ顔で答えた。

「そう言えば、グレイは、”人間界で、自分の姿の元ネタを探し出して、それを元に姿を作ってから、魔界に行く”って言ってたな…。てことは、カラスは1度人間界で、あの猫みたいな姿になって、それから魔界に行って、で、もう1回こっちに来たときに、今のその姿になった…ってことで、いいのか？」

「そう言うことだな。んじゃ。」

カラスは俺たちに背を向け、部屋を出て行った。

疑問究明（後書き）

まだ究明しきれてない部分もあるかも……。。

悪魔とは？

先ほど、アカツキから連絡が入った。今から家に来るらしい。

玄関でのんびり待っていると、カラスが2階から降りてきた。……なんかニヤニヤしてる。

「カラス、どうかした？」

「いや、ちよつと紅丞と話してた。」

「ああ……そう言うことか。」

カラスは、紅丞の事が好きだ。と、以前、カラス本人から聞いたことがある。

……いや、そういう悪い意味じゃなくて、ちゃんとした理由がある。悪魔には、性別が無い。

カラスの場合は、一人称が「俺」っていうのだけで、ちゃんとした性別が無いのだそう。…何か、僕みたいだね。違うか。

姿も、紅丞以外の人間——たとえば、女性の姿だったらまた別の一人称を語ってたかもしれない。要するに、あやふやなのだ。

だから、あえてカラスのプロフィールを書くならば——

カラス

年齢…不詳

身長…146センチ

性別…無

と言ったところだろう。少なすぎる。

僕も、正直言うとカラスの事はよく知らない。名前だって、最初は無いか言ってたけど、本当はあるのかもしれないし…。

本人、すごく意地悪だから、もしかしたら8割嘘をついている可能性だってある。表情が読めないんだよねあ…。

「グレイ？どうかしたのかー？」

考え込んでいると、カラスが目の前で手を振りながら僕の顔を覗きこんでいた。

「あっ？…いや、何でもないっ。」

僕は自分の顔の前で両手を振りながら答えた。

「……そういえば、カラス。」

「なんだ？」

「カラスは、その……紅丞のどこを好きになったの？だって紅丞、もう恋人いるんだよ？」

「恋人がいようが関係無えよ。俺はありのままの紅丞が好きなんだ。グレイだって、ありのままのアカツキが好きだって言ってなかったか？」

「うーん…まあそうだけど……。」

なんとなく一緒にされたくない…。

すると――

ピンポーン

家のチャイムが鳴った。

「アカツキが来たみたい。」

「…だな。じゃ、俺はもう戻る。」

そう言っているとカラスはいつもの球体の形になった。

……今は昼なので、羽は出現していない。では、どうするのか？

答えは簡単、僕の背中から戻るのだそうだ。……僕もそこら辺よく

わからないんだけどね。

「はい。」

とりあえず返事をして扉を開ける。

「おはよつ、アカツキ。」

「おう。」

アカツキは僕の頭をくしゃくしゃと撫でながら家に入った。

3日目の吸血

「未来ちゃん。」

紅丞先輩の部屋で、のんびりしていると、グレイが入って来た。

「アカツキが来たよ。」

「あ、解った。」

私は先輩と一緒に部屋を出て、リビングに移動した。

「……なんか、久しぶりな感じがする。」

私が姿を見せると、暁文がそう呟いた。

「そりゃあ、この小説、時間そんな進まないからね……」

風金さん、小説とかでよくある”あれから3日後”とかいう表現があまり好きじゃないらしい。小説と小説の間があくのは構わないみたいだけど。

時間軸が支離滅裂なところが多いんだよね……まあ、作者が無能のノープラン野郎だから仕方ないけど。

「……今日は紅丞先輩もグレイも見てることだし、できれば優しくね？」

「解ってる。」

暁文は抱き寄せることはせず、肩を掴み、首の噛み痕に噛みついた。
「んっ……。」

確かに、少々刺しづらそうだ。

刺しやすくなるかは解らないけど、とりあえず爪先立ちしてみる。

「……ありがと。」

小さく一言お礼を言われ、少し恥ずかしくなる。

よくよく考えてみれば、私は身長159センチ（作者と同じ）で、暁文は身長175センチ（作者の兄と大体同じ）だから、刺しづら

いのも頷ける話なのだが――

「……終わったぞ。」

――と、考えてる間に終わったらしい。性別も男になってる。

「じゃあ、次はグレイだな。」

俺はしゃがみながらグレイを呼んだ。

「はい。」

グレイは俺に近付く。

「……未来ちゃん、僕、今日は朝ごはんも食べてないから、もしかすると、かなりの量吸っちゃうかもしれないけど……。」

「平気だよ、優しくしてくれればいいし。」

それを聞き、グレイは笑顔でまだ穴が開いている噛み痕に吸いついた。

数分後、性別が切り替わり、グレイは私から離れた。

私は立ち上がれず、案の定その場に手について倒れてしまった。

「未来……。」

紅丞先輩が心配そうに私に近付く。

「あ……先輩、大丈夫です……。」

口ではそう言えるものの、実際は眠くて仕方ない。

「未来、無理すんな、よっ……。」

暁文はそう言いながら私を軽々と持ち上げた。

「紅丞さん、昨日と同じ部屋でいいんですね？」

「ああ、頼む。」

暁文はリビングを出て、階段を上った。――その途中で、私はまた眠ってしまった。

3日目の吸血(後書き)

メリークリスマス!!! 作者は今年も1人!!!

悪魔の悪戯

「ふう……。」

俺は再び部屋に戻った。――また暇になったあ…。

「ああ……。」

ベッドに座り、思いつき後ろに倒れる。

ボフツという音と共に、俺の身体が若干バウンドする。

「んうっ……。」

しまった、背中^{これ}で羽を……。邪魔だなあ、羽。
すると――

「よっ、紅丞。」

突如、上から目の前にカラスが現れた。

「わっ!？」

俺はびっくりしながらベッドから脱出した。

「相変わらず紅丞は情けないな。男とは思えねえよ。」

カラスはニヤニヤ笑いながら俺に話しかける。

「なっ……。悪かったな…。」

いや、普通に考えて、いきなり目の前に現れたらそりゃ驚くだろ。

「……っというか、いつからそこに？」

「んー？さっきから。」

「さっきって…いつだよ？」

「紅丞が部屋に入ってくる前から。」

「…何で？」

「なんとなく。」

そう言いながら、カラスはベッドから降りてジリジリと俺に近付く。

「な、何だよ？」

相手は悪魔、しかも魔王。俺を助けてくれるとはいえ、何を仕出か

すのか想像できない。

それに……なんか、さっきから得体のしれない恐怖みたいなものを
感じる。縮む時とは違う、別の恐怖。

「怖いかな？俺が。」

カラスは更に怪しい笑みを浮かべながら俺に問う。

俺は声を出さず、小さく頷いた。

「……だろうな。」

「え？」

「天使は基本、悪魔を怖がるんだよ。……グレイは俺とちゃんと契約
してるから、それはないけど。」

「……てことは、さっきから感じてるこの恐怖は、俺が天使だから
……ってことか。」

「だな。だから、こうすると――。」

そう言いながら、カラスは素早く俺の腕を掴んだ。

ドクンッ！！

瞬間、俺は、今まで感じたことのない恐怖に襲われた。

「あっ……！？」

声にならない叫びをあげながら俺は両腕を抱えながらその場に膝を
ついた。――足に力が入らない。

「ま、そう言うことだ。わかったか？」

カラスはそう言いながら俺から手を離れた。
手を離しても、まだ恐怖が残ってる。

「はあっ……はあ……。」

呼吸が乱れ、心拍数がどんどん上がっていく――身体の震えが止ま
らない。

「……紅丞、大丈夫か？」

カラスが呆れながら俺の顔を覗く。

”全然”という意味を込めて、俺は左右に首をブンブンと振った。

「何か……怖い……」

「んー……ちょっと触れる時間長かったか……」

カラスは俺に手をかざし、何かを呟いた。
すると、身体から恐怖が抜けて行った。

「な、何だ？今の……」

あんなに酷かった恐怖が、嘘のように消えている。

「紅丞の恐怖を少し消してやった。……立てるか？」

「ああ……大丈夫。」

俺は立ち上がり、ベッドに腰を下ろした。

「……でも、驚いたな……天使って、悪魔を怖がるんだな。」

「まあ、正確に言えば、悪魔の中にある”魔力”を怖がるんだけだな。」

”魔力”？なんだよそれ。」

「あー、そういえば説明してなかったな……。えっと、悪魔と吸血鬼は、魔力を持ってるんだよ。」

「そうなのか？」

「ああ。……とはいっても、吸血鬼で魔力を持ってるのは極僅かと言われてるけどな。悪魔は全員魔力持ってるけど。」

……で、天使は魔力を持ってない。から、悪魔の魔力を恐れたりするってことだ。解ったか？」

「……一応。」

「まあそう言っても、俺は魔王だからな。自分で魔力の量を抑えることぐらいできるさ。試しに、ほらっ。」

カラスは再度、俺の腕に触れた。

「うっ……！」

思わず身体が竦んでしまったが、先ほどのような恐怖は無かった。

「あ……あれ？」

拍子抜けしてしまった。

「……だから、自分で魔力の量を抑えたんだってば。」

カラスは呆れながらそう言った。

「あ、そうか……魔王ってすごいんだな……」

「だろ？」

カラスは笑顔で手を離れた。

「魔王はすごいんだよ、魔王は。」

……なんか、随分ご機嫌になったようだ。魔王ってそんな誇れるものなのかな……

「でもさ、その7歳児の姿じゃあ威厳まったく無いよな……」
そう呟いてみた。

「……あ？」

瞬間、カラスの表情が一気に陰悪になり、俺を睨んだ。

「うっ……」

目が……物凄く怖い。

「……紅丞、怒らないからもう1回言ってみろ。」

「もう怒ってるじゃないか……」

俺は目を逸らしながら反論する。

「お前さあ、威厳無いって言うとか、どういう神経してんだ？あ？」

「……聞こえてるじゃん……」

小声で呟く。

「なんか言ったか？」

「いや、何も……」

「……ま、確かに、この姿じゃ威厳が無いって言われても仕方ないか……」

カラスの表情が正常に戻った。……良かった。

「じゃ、今回は特別に、面白いものを見せてやるよ。」

カラスは俺の前に立った。

「目え離すなよ。」

妖しく笑ってそう言った瞬間、カラスの身体が真っ黒に染まってい

った。まるで、あの日の猫のような。

「……？」

俺が唾然としているうちに、カラスの身体はどんどん変化していき

最後には、俺と全く同じ姿になった。

「え！？」

俺は驚愕した。

感情で色が変わる瞳や、青い髪、白い肌を除けば、カラスの姿は俺と全く同じだった。

「な……何で！？」

「ま、これは魔王にしかできない特権みたいなもんだな。」

カラスは微笑みながら答えた。――俺が微笑みかけてるみたいで、なんか滑稽だ。

「い、いや、理由……理由説明してくれよ！！」

「理由って言ってもなあ……まあ、簡単に言えば、紅丞と初めて会った11年前、俺は紅丞の膝の擦り傷を舐めたはずだ。……それは覚えてるよな？」

「そんな事、あったような、無かったような……。」

「……あったんだよ、そんな事。……進めるぞ？」

その時に、紅丞の血……まあ要するに、その中にある遺伝子、DNAを読み取って、身体の年齢を変えることができるようになったってことだよ。」

「へえ……やっぱ魔王ってすごいんだな……。」

「だろっ？」

カラスは笑顔でそう言った。――意外と単純だな、こいつ。

「だから、この姿だと、”色んなこと”が”簡単”にできたりするんだ。」

カラスはそう呟いた。

「……え？」

言葉の意味が、解らなかった。

どういうことだ？と聞く前に、カラスは既に行動していた。

カラスは素早く俺に近付くと、俺を突き飛ばし、仰向けに寝かせた。そして、俺が起き上る隙を与えないように、腹の上に乗っかり、手を手で押さえて俺を抑えつけた。

——その全ての動作が、一瞬のように感じられて、何も抵抗ができなかった。

「っ!？」

気付いた時には、すぐ目の前にカラスがいた。——魔力を抑えているのか、恐怖は感じない。

「驚いたか？紅丞。」

カラスは妖しげな笑みを浮かべながら俺に問いかけた。……いや、違う。これは”妖しげ”なんていう表現じゃ物足りない。

これは——妖艶だ。どこか美しい、そう思える笑みだ。…本物の俺、佐川紅丞に無い美しさだ。

「驚いた、っていうか……重いよ、退いてくれ。」

あくまで平然を装う。——悪魔相手に。

「嫌だ。」

向こうは即答。それどころか、更に俺に顔を近づけてくる。

——怖い。魔力を抑えているはずなのに、別の恐怖を感じる。

俺、何されるんだ……!？

「……ふふ。」

「あはははははっ……。」

「え？」

「……っ、まさかてめえ、からかいやがったな!？」

どうやら相当ツボに入っているようだ。軽く涙目になつてゐる。――遊ばれた。悪魔に、玩具にされた……。

「ははははっ……。」

「いつまでも笑ってんじやねえよ!!」

「紅承え、目、真っ赤だぞ？…あはははつ。」

カラスは笑いながら、先ほどのように、真っ黒な姿になり、いつもの少年の姿に戻った。

カラスはそう言いながら、部屋を出ようとする。

……何がしたかったんだ、あいつ……。

悪魔の悪戯（後書き）

聖なる夜に小説執筆……あ、今日兄の誕生日だ。ハッピーバースデー&メリークリスマス。さっきも書いたけど作者は今年も明日も1人！！！

外出

「せんばーい。」

部屋で1人、仮眠でも取ろうかとベッドに横になっていると、未来が入って来た。

「未来、もう大丈夫なのか？」

「はい。」

「じゃあさ、その……お腹すいたんだけど。」

「そうですね、確かに、もう昼過ぎですし……じゃあ、ちよつと買い物に行きましょうか。」

「あ、じゃあ俺も。」

「解りました。じゃあもう憑依しておいてください。」

未来の言葉に従い、俺は素早く憑依した。

前回とは違い、あの真っ暗な空間に行くことを覚悟の上で憑依したので、液体を抜け出したときに着地失敗することも無かった。

「……ところで、未来。」

（何ですか？）

「今日の昼飯、何にするつもりだ？」

（……何がいいですか？）

「野菜じゃないなら何でも。」

（じゃあ野菜入れておきますね。）

「え!?!? 何で!?!? 何で!?!?」

俺の疑問に答えることなく、未来は階段を降りた。

「未来ちゃん、どこ行くの？」

階段を降りた時に、グレイが声をかけてきた。

「あ、ちよつと買い物に。」

「紅丞は？」

「一緒にいるよ。」

「そっか、気を付けてね？」

「うん、それじゃ。」

未来はグレイを軽く撫でて、それから家を出た。

外出（後書き）

メリークリスマス……バタッ

クラスメイト

店を出るころには、もう夕暮れだった。

「結局こんなに野菜買いやがって……。」

（別にいいじゃないですか。ちよつとは偏食治してくださいよ。）

「でも……はあ……。」

未来は両手いっぱい買い物袋をぶら下げながら、家路についていた。

買い物をしている途中、未来の心臓の音が聞こえたりして、そのことで未来を弄ったりもした（羽の時の仕返し）が、

今度は未来がその仕返しと言わんばかりに大量の野菜を購入するもんだから、最終的に俺の方が折れてしまった。

（こんなに買っちゃいましたし…今日の昼食はもしかしたらサラダになるかもしれないですね。）

「ええ…？ 腹減ってんのにサラダは辛^{つら}いって……。」

（嫌なら食べなくていいですよ？）

「……食べる。」

（それでいいんです。）

畜生…どうにかこいつを言い負かしたりできないかな……。

俺の考えていることは、未来には伝わらない。逆に、未来の考えていることは大体俺に伝わる。

これを利用して、未来の弱点を探ってもいいかもしれないな。——
って、恋人の弱点探そうとするなんて…何考えてんだ、俺。

（そろそろ寒くなってきましたね……早く帰りましょうか。）

足を速める未来。

その時――

「あれ？安藤さん？」

後ろから、聞きなれた声が聞こえた。

「え……？」

未来が恐る恐る後ろを振り向く。

そこには、俺のクラスメイト――鮎川がいた。

鮎川は俺と同じ部活なので、結構交流も深い。

そして、鮎川は以前、俺に告白してきたことがある。

時期はちょうど、去年の6月。俺はそのころから未来に恋をしていたから、「他に好きな人がいる」という理由で、鮎川を振っていた。だが、振ってから――いや、正確には振った後から、鮎川は俺に突っかかってくるようになった。

流石に家にまで来るとかそういうことはしなかったけど、やっぱり振られたことを引き摺ってるんだな――と思われるような行動ばかりとっていた。

「あ……鮎川先輩。こんなところで何を……？」

鮎川の家は、この付近じゃない。そのことは未来も俺も知っている。部活中に話してたから。

「何をつて、安藤さんこそ何をしてるの？あなたの家はこの付近じゃないでしょ？」

「いや、私は、その……。」

未来の心拍数が上がってる。悟られまいと頭をフル回転させているようだ。

「もしかして……佐川君の家に行こうとしてる？」
鮎川が、未来の目を真っ直ぐ見ながらそう言った。

——ドクンッ。

瞬間、未来の心臓が、大きく脈打った。

「な、なんで、そう思うんですか……？」

未来の声が徐々に震えだす。鮎川の俺に対する行動は、未来も知っている。だから、不安なのだ。

「未来……落ち着け、大丈夫だから。」

俺は未来の中から優しく呼びかける。

今、未来が感じているものは——恐怖。俺と未来の関係がバレるという、恐怖と不安。それは俺にも伝わってくる。

鮎川はそんなことに一切気付かず、続けた。

「だって、その買い物袋……佐川君、昨日からインフルエンザで休ましいし、そのことを考えれば、簡単にわかる事よ。」

そうだった……俺は確か、インフルエンザで1週間休みをもらっていることになってるんだ……。

……って、なんで鮎川がそのことを知ってるんだ？

インフルエンザの事を伝えたのは昨日。しかも、先生にしか伝えない。それに、昨日は学校は休みだったはず……部活も無いはずだし……。

「……なんで、インフルエンザの事、知ってるんですか？」

未来も同じことを考えていたようだ。

「何でって……調べたからよ。悪い？」

鮎川は堂々と言ったのけた。

「っ……。」

未来が買い物袋を持つ手を力強く握る。

「……何故、そこまであの人にこだわるんですか？」

未来の感情はいつの間にか、恐怖から怒りに変わっていた。

「未来、落ち着け！挑発しちゃ駄目だ！！」

俺は中から必死に呼びかけたが、今の未来には聞こえてい無いうだった。

「何故って……佐川君、私を振った時に、”他に好きな人がいる”って言ったのよ。それが気になって……でも、たった今、その好きな人が解ったわ。」

鮎川はゆっくりと右手を持ち上げ、未来を指さし、こう言った。

「貴方よ、安藤未来。」

その顔は、嫉妬に歪んだ表情をしていた。

「どうして貴方なのか……確かに貴方は、正義感が強くて、非の打ちどころのない、”完璧な人間”だわ。でも、たかがそれだけの理由で、どうして佐川君は貴方を選んだのかしら？」

”完璧な人間”……その言葉を聞いた瞬間、未来の感情が、怒りから全く別の”何か”に変わった。

未来の心拍数がどんどん上がっていく。

——このままじゃ、まずい。俺はそう判断した。

「……未来、帰ろう。もうこいつの事は放っておけ。」

中から呼びかける。だが、未来からの返事はない。

「……未来っ！！！！」

思わず怒鳴った。

瞬間、未来の身体がほんの少しだけビクッと強ばった。

(……解りました。)

未来は鮎川に背を向け、歩き出した。

「思いつかないでよ、貴方のその正義感、人からしてみればただの”迷惑”でしかないのかもしれないんだからね？」

鮎川が追い打ちをかけるように、後ろから声をかける。

「……………」

未来は立ち止らず、振り返りもせず、無言で俯きながら、足早にその場を去った――。

クラスメイト（後書き）

鮎川の名前は決まっています。

：だって、重複しないように名前決めては調べてを繰り返しても、なんかアダルトなサイトばかり引っかかるんだもん：馬路アリエンティ。

完璧な人間なんて……

未来は、家に帰ってくるまでずっと無言のままだった。

俺に何かを悟られないように、何も考えないように、ずっと一点を見つめながら歩いていった。

「ただいまー……。」

小さく、元気がない声で、そう言いながら玄関の扉を開けた。

「未来っ……」

俺は素早く未来から抜け出した。

未来は、とても悲しげな表情をしていた。

「未来、あんな奴、気にしなくていい。どうせいつもの事だから。」
「でも……。」

俺は未来の肩を掴み、自分の方に向けた。——正直、こうするだけでもかなり勇気がいる。

「未来、俺は、お前が正義感が強い完璧な人間でも、それを迷惑だと思ったことはない。」

そう言っても、未来の表情は暗くなる一方だった。

「……やめてください。私はそんな立派じゃありません。」
未来が呟く。

「何言ってるんだよ、お前は完璧な——」

「やめてくださいっ!!!!」

突如、未来が叫んだ。——俺は、掴んでいた手を離れた。

「…嫌なんです。完璧とか、立派とか言われるの、本当に嫌なんです……。」

未来の目から、涙が零れた。

「いないんですよ……この世に、完璧な人間なんて、存在しないんです……。」

涙声で、俺に訴えた。

そして、そのまま無言で、俺の横を通り過ぎ、階段を上って行ってしまった。

……泣かせてしまった。恋人を、大切な人を、傷つけてしまった……。

「紅丞、どうしたの？今の……何かあったの？」

騒ぎを聞きつけ、グレイがリビングから顔を覗かせた。――その声は、今の俺には届かなかった。

「畜生っ……。」

俺はまたしても、家を飛び出してしまった。

絶望——その2

「……………」

真っ暗になった、誰一人歩いていない住宅街。

そこを、俺は歩いていた。

どこに行けばいいのか……それすらも、わからない。今はどこにも行きたくない。

未来を悲しませた……ただ、その後悔だけが、俺を取り囲んでいた。

ふと、身体に電流が流れる感覚。1歩1歩、歩みを進めるたびに、身体が縮んで行っているのが実感できる。

——でも……それでも、まったく焦る気持ちが湧かない。もう俺なんて、縮んで消えてしまえばいい。そう思っていた。

「あっ……」

ズボンの裾を踏んでしまい、その場に転ぶ。

「……………」

身体は、ついに新生児ほどまで縮んでしまった。

もっと速く、もっともっと速く縮んでほしい。もう、消えてしまいたい……。

もう、意識まで薄れてきた……。

その時——

「紅丞先輩……!!」

後ろから、未来の声が聞こえた――ような気がした。

同じころ

「未来ちゃん、どうしたの？」

僕は未来ちゃんが使っている、来客用の部屋に足を踏み入れた。

「グレイ……。」

未来ちゃんは、椅子に座って窓から外を眺めていた。

「未来ちゃん、元気ないけど……何かあった？」

僕がそう聞いた瞬間、未来ちゃんの目から涙が零れた。

「!?!?…未来ちゃん？」

「グレイ、私……。」

未来ちゃんは、泣きながら僕に事情を説明してくれた。

「紅丞先輩、そのことを励まそうとしてくれたのに、私、それを無下にしてしまって……っ。」

「未来ちゃんが言ってた……」完璧な人間なんて存在しない。」…

僕も、その言葉は本当だと思う。

僕だって、完璧な吸血鬼でもなければ、完璧な天使じゃない。他の吸血鬼だって、一様に完璧な吸血鬼だとは呼べない。

…未来ちゃんは、正しいことを言っただよ。紅丞だって、それはわかっていると思う。でも、今の紅丞にとって、未来ちゃんは、それほどまでに偉大な人物だってことだよ。」

未来ちゃんの頭を撫でながら、僕はそう言った。——正直、励ますとか、一切やったことないから、励ませてるかどうかかわからないけど……。

「ありがとう、グレイ……。」

未来ちゃんはそう呟き、服の袖口で涙を拭った。

「…謝らなきゃ、紅丞先輩に……。」

そう言いながら立ち上がり、部屋を出て行こうとした。

「あ、待って、未来ちゃん。」

「何？」

「紅丞、さっき、また飛び出して行っちゃったんだけど……。」

紅丞よりも先に、未来ちゃんが心配になったから、つい、そのことを言うのを忘れていた。――僕も酷いやつだ。

「え……!？」

途端に、未来ちゃんの表情が青ざめていく。

そして、未来ちゃんも、勢いよく部屋を出て行った。

仲直り

「先輩……紅丞先輩、しっかりしてください!!」

未来の声が聞こえる……まるで、昨日の朝みたいだ……。
てことは、俺、死んでないのか?…消えて、ないのか?

「んっ……。」

そっと目を開けると、眩しい光が目映った。

「眩しっ……」

思わず腕で光を遮る。

「先輩っ……。」

未来が涙声で俺を呼んでいる。

「未来……どこにいるんだ?」

左右を見渡しても、未来はどこにもいない。それどころか、なんか
普段の景色とは違うような……。俺、今、ベッドに寝てるんだよな?

「ここですよ、先輩。」

声のする方へ振り向く。

未来は、俺の遙か上にいた。

「……は?」

意味が、解らなかった。

「先輩、今、自分がどこにいるか…解ります?」

「え、だって、ベッドにいるんじゃない?…あれ?」

立ち上がり、再び周りを見渡す。

……違う、ベッドじゃない。右を向いても、左を向いても、ベッド

から見える景色とは違う。

それに、触っている布の感触も、ベッドのシーツとは違う。…ここ、どこ？

「未来、ここ……あれ？」

自分の所在を聞こうとした瞬間、自分の服装が違うことに気が付いた。

さっきまで、少し暖かめの服装をしていたはずなのだが……今は、身体に布を巻いただけの姿になっている。上下に分かれて、セパレートで。

「…ど、どうなってんだ……？」

全く状況が理解できていない俺に、未来がついに真実を打ち明けた。

「今の先輩の身体は……推定、10センチってとこですね。」

「…は？10センチって……え！？」

ちょ、ちょっと待て！！……どういことだ！？……何でそこまで縮んでしまっただよ！？

っていうか、嘘！？じゃあ俺、もしかして昨日、あのまま気を失って……え！？」

「せ、先輩、落ち着いてください。」

未来が俺を落ち着かせようと、俺の身体に触れた。——本当だ、未来の手が大きい。俺の身体くらいある。

「えっ……えゝ？」

10センチって……もはや何歳レベルとかそう言うんじゃない表せねえよ……。

そして、1つ、気になることが――

「……なあ、未来。」

「何ですか？」

「この服…っていうか、この布、誰がやったんだ？」

「あ、私です。」

「つてことは、俺の裸見たってこと？」

「そうですけど……。」

それがどうかしたんですか？とでも言いたそうな顔で、俺を見る未来。

「……先輩、もしかして、恥ずかしいんですか？」

あ、表情を読まれた。…とりあえず俯く。

「…そりゃあ、まあ。」

付き合ってまだ一週間も経ってないのに……もう裸見られた…恥ずかしい……。

「情けないですねえ……裸くらい、いいじゃないですか、男なんです。」

……そう言う問題？（・ω・、）

「それに、先輩、結構綺麗な身体してましたよ？天使だから……ですかね？」

未来は笑顔でそう答えた。

「い、いや、そんな冗談言うな…恥ずかしい……。」

「私は本当のことを言ってるだけですよ？」

そう言いながら、未来は素手で俺の身体を優しく掴んだ。

そして、親指の爪の先で、器用に俺の顎を持ち上げ、自分の方を向けさせた。

「あの、先輩……1つ、謝らせてもらっても、いいですか？」

「え……？」

未来は俺の目をまっすぐ見て――

「……昨日、先輩の事を、あんな風に言ってしまった……本当にすみませんでした。」

——そう言った。

「あっ、いや、その……俺の方こそ、未来の事を傷つけてしまつて、本当にごめん……」

でも、俺、本当に、未来の事が好きだから、その……あの言葉が、そんなに嫌だったなんて、気付かなくて、だから——」

俺の言葉を遮るように、未来が俺を持ち上げた。

「わっ……」

驚いて変な声が出た。

「……いいんです。先輩の気持ちは、充分伝わってますから。」

そう言いながら、未来は俺を、もう片方の手のひらに乗せた。——暖かい。俺なんかよりも、断然暖かい。

「未来……」

未来は、いつもよりも優しげな表情をしていた。

「先輩、仲直りしましょう？ 私も先輩も、今度からは、互いの言動に気をつける。って事で。」

「ああ、そうだな。」

握手できない分、言葉で、俺たちは約束した。

「……ところで、未来。」

「何ですか？」

「ここ、どこだ？ なんか、景色が違うし……」

「えっと、ここは先輩の部屋ですよ。」

「え、じゃあ俺が今まで寝てた場所って？」

「机の上です。」

俺は未来の手の上から先ほど寝ていた場所を見下ろした。——確かに、俺の机だ。その上に、布みたいなのが置いてあるから……多分あの場所に寝ていたのだろう。

ついでに、上を見上げると、机の電気がついていて、さっきの眩しい光はこれか。……確かに、外を見ると、まだ真っ暗だった。

「自分の机の上の景色が解らないってことは……もしかして先輩、普段あまり勉強してないんですか？」

「え？あ、いや、えっと……あはは……」

「笑ってごまかさないで下さい。……全く、自分の恋人が家事もできない、勉強もできない人だとは思いませんでしたよ……よく進級できましたね、そんなんで。」

「別に、そこまで言わなくていいだろ……」

多分、今、未来に触れてなかったら、絶対縮んできると思う。

「まあ……これ以上先輩が縮んだら嫌ですから、それ以上は言いませんけど……」

それ以上があるのか？今の言葉に。

「……でもさ、未来。」

「何ですか？」

「確か、俺ってさ、その……縮んだら、キスじゃないと元に戻らないんだろ？」

俺の身体は今、10センチしかない。……こんなじゃ、キスできない。

「そこなんですけど、どうやら違うみたいなんですよ。」

「え、違うって……？」

「天使は、ある一定の大きさまで縮むと、さすがに身体が危険と判断して、キスなしでも、触れるだけで、一定の大きさにまで戻るらしいんです。」

「……でも、今、俺と未来は触れているけど、身体の高さ、変わってないぞ？」

「それは先輩の中の人間の血が邪魔をしている所為です。……でも、時間が経てば成長するはずだって、カラスが言っていました。」

「カラスが？……あいつ、悪魔のはずなのに、なんで天使の事知ってるんだ？」

「さあ……？魔王だから、何でも知ってるんじゃないんでしょうか？」
「ふーん……。」

その時――

「未来ちゃん、紅丞はの様子、どう？」

グレイがそつと部屋に入って来た。

「あ、グレイ。…先輩、気が付いたよ。」

未来がグレイの目線の高さまで、俺を乗せた手を降ろした。

「紅丞…。」

グレイが心配そうに俺の元へと歩み寄る。――手には、ビニール袋をぶら下げている。

「グレイ、心配かけて、悪かったな。」

「本当に心配したよ……だって紅丞、あれから丸一日気を失ったままだったもん……。」

……はい？

「あっ、グレイ、その事は……。」

「え？未来ちゃん、言ってなかったの？」

……ごめん、紅丞、今のは忘れて……って、それは無理か。えつと――

グレイは必死に言葉を探しているようだった。

えーつと……？話を整理しようか？

まず、俺はあの日、家を飛び出して、縮んだ衝撃で気を失ったんだよね？うん、そこまでは理解した。

……で？更に丸一日気を失ったままだった……と？なあってんだ。そ

れだけのことか。それだけの……

って――

「ええええ!？」

ちよつと待てよ!!まさか、今日って、4日目!?4日目の夜!!?え!?!あの作者、”あれから3日後”とかそう言う表現嫌いだから、どうすんのかなーとか思ってたけど、まさかこういうやり方すんのか!?!

変わんないじゃん!!”あれから3日後”ってやり方とそんな変わんないじゃん!!やっぱ無能だ!この小説の作者無能だ!!!”

「お、落ち着いて、紅丞。無能だと思うのは僕も同感だけど、落ち着いて……。」

「あつ……ごめん、 그레이……つい……。」

さつき以上に取り乱してしまった……。

にしても、あの作者そんなやり方すんのか……なんか恐ろしくなってきた…。

「それで、これからのこと、なんだけど……。」

그레이が話を始めようとするのを、俺は止めた。

「 그레이、ちよつと待ってくれ。」

「え、何?」

俺は自分の腹を抑えながら言った。

「……腹減った。」

そういえば、今日――じゃなくて、昨日の昼から何も食べていない。「そう言うと思って、ほらっ。」

그레이は持っていたビニール袋から、パンを取り出した。

「それ：どうしたんだ？」

「さっき、未来ちゃんが買ってきたんだよ。」

そう言いながら、グレイは器用に袋を開け、パンをちぎり、俺に手渡した。

「ありがとな、グレイ。」

そう言うと、グレイは恥ずかしそうに笑いながら「どーいたしまして。」と答えた。

仲直り（後書き）

彼氏が欲しいなんて思ったことはないと言わない。

問題——その2（前書き）

あれから3日後……って言う表現、確かにそんなに好きじゃないんですが、覚えておけば損はない。と判断したんで、今度からちよつと練習しようと思います。

問題——その2

身体が10センチまで縮んでしまった——というのは、かなり問題が多いともいえる事態だ。

食事は、何とかなるとはいえ、移動はどうすればいいのか？という話だ。

俺がその疑問を未来とグレイにぶつけると、案外答えはすぐ帰ってきた。

「それは大丈夫です。先輩が元の大きさに戻るまで、私が面倒見ますから。」

「でも……風呂は？」

「そこは……考えてませんでした。」
「考えておけよ……」

「ねえ、未来ちゃん、こういうのはどうかな？」

グレイが未来に耳打ちする。

「……その方法なら、ちょっとは大丈夫かもしれないけど……」

「でしょ？ やってみようよ。」

「……それじゃあ。」

未来はいきなり俺を持ち上げた。

「うわっ!？」

そして、そのまま立ち上がった。

「ちよっ、未来、高い!! 高いって!!」

高所恐怖症ではないけどこれは怖い。

「え? ……あ、すみません。」

未来は慌てて俺を机の上に置いた。

「……ったく……せめて何をするのか説明してくれよ……。」

「えっですな……コップみたいな小さな容器に、お湯をためて、それをお風呂代わりにすればいけるかなーと思ひまして。」

「まあ、いけないことはないんだろうけどな…。」
恥ずかしいとは、なぜか言えなかった。

「……っていうか、未来、明日からどうするつもりだ？明日も学校、あるんだろう？」

「そこなんですよね…どうしましょう？」

縮む前の俺だったら、憑依でも何でもしてついていくのだが、この大きなじゃ憑依できない。

「じゃあさ、明日は僕が紅丞の面倒見てるから、それでいいんじゃない？…カラスもいることだし。」

「「……逆に嫌だ。」」

俺と未来は同時に答えた。

「え、なんで？」

グレイからの質問に、まずは未来が答える。

「だって、先輩は私と一緒にいないとダメなんだから、どうにか工夫して、学校に連れて行かないと。」

続けて、俺も答える。

「俺も、カラスと一緒にいるくらいなら、例え危険でも、未来と一緒に学校に行く事を選ぶ。」

「……未来ちゃんの言い分はなんとなく解ったけど、紅丞はどうして？…カラスと、何かあった？」

あ、こいつらは知らないのか……いっそ、真実を言ってやっても良いが、それが原因でカラスの機嫌を損ねてしまうかもしれない。

…そうなると、俺が人間に戻れるかどうかもう怪しくなってくる。どうにかして誤魔化そう。

「さあな。……なんか怖いんだよ、あいつ。」

俺は肩を竦め、手を水平に広げながら答えた。

「ああー……そっか。天使は悪魔を怖がるんだもんね…仕方ないか。」

上手く誤魔化せたようだ。

「じゃあ……どうしよつか？」
3人で「うーん……。」と頭を悩ませる。
その時――

「未来も学校休めばいいんじゃないかね？」
そんな声が聞こえた。

「え？」

後ろを振り向くと、俺たちよりも少し離れたところにカラスが立っていた。

「カラス……そうはいかないんだって。」

俺は呆れながらそう言った。

「何で？どーせ明日を過ぎれば、紅丞は人間に戻るんだぞ？……だったら1日ぐらいいいじゃないか。」
「でも――」

「カラス……私、明日休む。」

俺の言葉を遮るように、未来がそう言った。

「……ま、その方がいいだろうな。」

カラスが答える。

「でも、未来……。」

「先輩、私、ついさっき、”先輩の面倒を見る”って言いましたよね？だからです。」

「……ずる休みになっちゃうけど、本当にいいのか？」
未来はずる休みが苦手だったはず……。

「先輩と一緒にいられるなら、それでもかまいませんよ。」
そして――

「……それに、ちゃんと先生には風邪だって嘘ついておきますんで、大丈夫です。」

「あ、そう……。」

あくまでずる休みという認識はされたくないらしい。ずる休みには変わないけど。

その後、3人で（カラスはほぼ傍観者みたいなもんだった）俺の事について話し合い、結果、”紅丞は多分、明後日には元の大きさに戻ってるはずだ”という結論に至った。

……びっくりするほど不安な結論だな…。

問題――その2（後書き）

最後の方は絞り出して書いたんで、ちよつとぎこちないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6191z/>

人間天使と性別人間

2011年12月26日16時53分発行